

一五〇
うだが、書の方は、大抵菘翁と署したやうである。然るに此の菘翁時代に入つてから、書が大に變化した、中には一種不思議なる變體をさへ見ることがあつた、或る時田中舍身氏が、余の家に来つて云ふに、自分の父が在世中、確かに貫名に書いて貰つたと云ひ傳へてある、貫名の書の屏風があるが、東亞女學校の資金の足しにせんと目的にて、これを賣却しようとしたが、十人が十人、偽物であると云つて、取合はぬ、就ては是非先生の鑑定を得たいとの希望であつた。折角の依頼でもあり、又さう云ふものを見るのが研究の一つであるから、早速出向いて一見した、所が其の屏風の文字なるものが、悉く傾斜して、一として正立して居るものが無い、實に不思議なる

結體である、併し貫名の書たることは、疑ひもない、唯だ其の字體が、傾斜して居るのは、何の爲めであるか、解釋に苦しんだ、それ故貫名の書たることは、疑ひないが、字體の傾斜せるは、何の爲めなるか、想像し難いと辭し歸り、其の後も貫名の親戚に就いて、種々調べて見ると、七十二三の頃、貫名が中瘋に罹り、間もなく廻復したと云ふことが知れた、それで漸く田中氏の屏風は、其中瘋の時分に書いたものと云ふことが判つた、貫名の書が、彼の「書譜」に云へる如く、終りに平正に歸すべき所を、さはなくして、險絶と平正とを、一緒に持込んだやうは書風になつたのは、貫名と云ふ人は、極めて細心の人であつたが、晩年に至つて、此の細心を、書學の爲

めに緩めて仕舞つた、是れ平正と險絶とを、晩年の書に
持込み來つた所以である（書道及畫道）

鳴鶴翁は、頗る多く貫名の筆跡を所藏されて、其の中に
は、若い時の者も晩年のものも、大字も小字も、種々あるが、
嘗つて其の最も晩年の筆だと云ふ、絶句の一幅を、床に
懸けて居られたのを、見たことがある、此の時は、無論
中氣に罹つて居られたのであるが、其の初めの句に、「嚴
寒云々」とある、「嚴」の字の草筆が、點を三つ位打つ積り
であつたらしいのに、手が震へて、何でも五つ位打つ積り
なつて居り、書き初めの三字許りは、鳥渡工合が悪いが、
後は流石に、多年鍛ひ上げられた腕だけに、縦横に揮灑
されて居るが、これを全體の上から見るならば、平正と

中壇後の
の文字
の終着

乘
壇

云ふよりは、寧ろ險勁な方が、餘程勝つて居るとも云ふべく、翁が平素好んで謂ふ所の「痛快沈着、毫髮遺憾なき」有様が現はれて居た。

(考)

梁同書曰く、帖は、人をして看せしむるもので、人をして摹せしむるものではない、今人は只是れ、舟を刻むに、劍を求めて居るので、古人の書に對し、一々摹畫するにと、宛も小兒が仿本を寫すのと同じく、主として形似に力めて居るのであるから、文字に自家の特徴と云ふものがない。試みに唐以來に於ける、多少の書家を看るに、一として似て居るものが有るか無いか、王羲之主獻之は、父子でも同じくはない、「蘭亭」を臨したものは、千人もあ

羲獻父子は面
貌を同うせず

らうが、各々同様でない、顔平原(真卿)の諸帖は、一帖ごとに一面貌を具へて居る、正に是れ其の然るを知らずして然るので、一定の繩尺があるのではない。故に李北海は云ふ、我を學ぶものは死し、我に似るものは俗なりと、正に世の木佛に向つて、舍利を求むる者の爲めに、一鍼を痛下した次第である。

二十三 斯道の妙域に達する奥義

書を學ぶの三要に就ては、最初にこれを承はりしが、書道の妙域に達する奥義としては、何事を心得居れば宜しきか。

書は心畫なり、心正しければ筆正しく、自己の性情の筆墨に現はるゝものなれば、人品高尚にして、識見該博ならざ

るべからず。

其の人の文字を見て、其の人の性質氣風が分るとは、昔から云ふことで、間違ひなき觀察である、それ故に、書を學ぶものが、技術として盡すべき手段を盡し、學ぶべき事柄を學ぶは、云ふ迄もないことであるが、更に其上に、人品を陶冶向上せしむることを謀らないと、如何に法則に叶つた立派な文字でも、其の文字の品格がない、古來書家の字として、餘り尊敬を受くるものゝ少ないのは、此の點に歸着するので、書は實に心畫である、心の畫かれたものである、故に碩學高僧等が、更に何等の世に求むる所なく、文字を旨く書かうとも思はなければ、それに依て名を成さうとも思はず、虚心平氣で書いたも

のには、字は拙くとも、何となく趣味の籠つたものが多い、書聖王羲之は、素より文字も上手であつたに相違ないが、それと共に、又人品の高尙なる人であつたことが傳へられて居る。彼の書名が、萬世不朽なる所以は、畢竟これに外ならぬのである。

然も人品が高尙なばかりでは、尙ほ足りない、識見該博にして、所謂書卷の氣が、文字の間に髣髴しないと、又何となく、物足らぬ感じを免れないのであるから、博く學問をして、識見を養ふことも、また書の品格を高むる上に、非常に大切なことである。

(考)

梁同書曰く、「心正しければ筆正し」と云ふことを、萬人は

多く道學の爲めに、此の語を借りて諫めたのだと解して居るが、獨り余はさうでないと思ふ、只だ極めて軟かい羊豪の筆を用ひて紙に落すことを要する、斯くする時は、正しからざるを怕れず、意を著けて把持せざると、浮淺恍惚の患とを怕れず、自然に靜かになる。

又曰く、人で云へば、亂頭蠡服と云ふ風態では、字とは云はれない、膠鬚髯面も字ではない、逸ならんことを求むれば、野となり、舊ならんことを求むれば、則ち拙だ、此處に半點たりとも、名を求むるの心があつてはならぬ。

此の梁同書の語は、非常に高尙な書論で、從來書家の中に、斯る心得を有して居るものは、至つて少ない。實は

これは、單に書のみには限らない、凡そ品性を重んじ、人格を尊ぶものにあつては、常に此の心得が無くてはならぬ。殊に日本の書家の字といふものは、誠に厭味が多くて、所謂書匠の氣に満ちたのが甚だ多いことは、如何にも慨歎すべきことであるが、要するに此の奥義を知らないからである、或は知つて居ても、これを行ふことが出来ないからである、書を學ぶものゝ、大に服膺すべきことであらうと思ふ。

書史第二

南帖北碑論

支那前朝、即ち清の阮元(雲臺)が、南北書派、南帖北碑等の議論を唱へ、次で包世臣(慎伯)の如き論書家あり、また憑敏昌(魚山)、吳榮光(荷屋)、翁方綱(覃溪)、楊守敬(惺吾)等の如き、金石學者も輩出し、碑學が一般に盛になると共に、書風も稍や一變の姿を呈したのであるが、更に鄧石如(完白)の如き能書もあつて、其得意とする篆書は云ふに及ばず、他の各體にも通じ、隸書に於ては桂馥(未谷)、伊秉綏(墨卿)、陳鴻壽(曼生)、黃易(小松)等の諸家もあつて、何れも漢人に根柢し、唐宋を超越するの概あるものも少くない、尤も行草は、遠く明人に及ばないのであるが、要するに

皆な碑版を尊重するに至つた影響で、苟も書を談ずるものは、漢魏以下を語らないと云ふ風もある。併しそれは極めて偏狭な話で、唐宋以後と雖も、決して排斥すべき理由はない。

六朝以前のものに就ては、先年鳴鶴翁自から筆を執つて「論書三十首」を稿し、これに小解を附して世に公にされたので、此の時代に於ける、書風の變遷と、碑版の品評に關する大要は、同書に據つて、これを知ることが出来るのであるが、併しこれは極めて小冊子でもあり、漢文でもあり、殊に明治三十四年六月の發行に係り、事は、書學の研究に一新紀元を開くべき有力なる材料を提供したる、彼の敦煌の發掘以前に在つたので、其の後に於け

西中郎將使持節
平西將軍涼州刺史
史瓌之十世孫
世祖軌晉惠帝永

張猛龍碑 (北魏)

る事實の發見に由つて、翁の所見も自づから異なる所あり、或は又、天變地異の爲めに、原碑の所在に異同を生じ、甚しきは雷火に破碎されて、また片塊をも留めないやうなものもあり、勢ひこれを修正しなくてはならぬものもある。

それから又一方の、晋唐方面に就ては、別に翁の「論書十二絶」がある、併しこれは單に詩のみで、小解をも附せられて居らず、冊子にもなつて居ないのであるから、本書中にこれを收むることゝした。

要するに「論書三十首」「論書十二絶」は、各碑に就て、これを論評するのが主になつて居て、謂はば碑版の列傳とも云ふべきであるが、本書に掲ぐる所の「書史」は、主として其

一六二
の時代の特徴を明らかにし、書學に志すものをして、歸する所を知らしめんとするのが目的であるから、若しも同書と併せ観るならば、研究上、少なからざる便益を得ることであらうと信ずる。

一 三代—古籀文

凡そ藝術を研究するに當りては、必らず實物に據るべきもので、如何に空論を闘はして見た所が、そこに形質を具へた作品がなくては、其の議論もまた空に終らざるを得ないのである。書道の歴史を談ずるも、また其の通りで、これを論評するには、是非とも其處に何等かの實物があつて、それに據つて論評するにあらずんば、論評の價値を認める譯には往かない、支那最古の書として、今日に存するものは、謂ふまでもなく、金石に刻せられたるものであつて、其の以外には何物もないのである、然るに世の書道を談ずるもの、口を開けば、伏羲、神農より説き起し、河圖洛書の如き、漠然たることを述べ、蒼

韻文字を造つて云々と謂はねば、氣が濟まぬ有様であるが、實は書道の上に何等の益なく、荒唐無稽にして、却つて人を誤るの虞れがある。故に本書は此の如き方法を取らずして、直ちに實際の研究に益する所、即ち金石に現はれたるものより始めて、漸次に近代に及ぶこととし、其の變遷の次第と、其の間に現はれたる著しき書蹟とに就て、力めて研究者の爲めに、實際上の知識を與へんことを志したもので、要は所謂「多見多聞」の一助たらんことを期するに外ならぬのである。

鳥跡、蝌蚪の文字

書道の研究は、三代より始まるので、其の以前に鳥跡、蝌蚪等の文字があつたと傳へられては居るが、空しく其の名が残つて居るばかりで、如何なる書體の文字であつたか、

鐘鼎彝器

實地にこれを見たものはない。

然るに三代に至つては、現に存する所の鐘鼎彝器の銘に據つて、其の當時の書體を研究することが出来るのであるから、書道の研究と云へば、此より始めるの外はなからう。所で又或る一派の人には、これを古文と籀文しゆんぶんとに分けて、説くものもあるが、何處までが古文で、何處からが籀文であるか、其の分別を附けることは出来ない。

吳大澂の古籀補

先年余が支那漫遊の當時、鐘鼎の蒐集を以て有名なる吳大澂（清卿）を訪ねて、其の所藏を視、并せて其の説を聞いた時に、吳もまた古文と籀文との分別の立て難きを述べ、これを「古籀」と名づけて居ると謂つて居た、それに關する意見は、同氏が著はす所の「說文古籀補」に詳かであるから、就て見る

べきである。

而して又或る一派の論者たる康有爲の如きは、鐘鼎彝器を以て、劉歆の偽造となし、随つて其の文字もまた、取るに足らざるものだと言つて居るが、康有爲の議論は、爲めにする所あり、且つ書道に就ては、造詣も餘り深くないのであるから、それに據つて鐘鼎文を抹殺することは、逆も出來ないので、却て識者の笑を招いて居る程である。

今一つの大切なる遺跡は、「石鼓の文」である、これは從來、周の宣王の大狩の時に作ったものと云ふのが、定説になつて居たが、また他の説に據ると、或は秦の時に作ったと云ひ、或は更に派つて、周の成王の時のものとも云つて居る、時代の前後に關する問題は、暫らく措くとして、李斯其の

他に於ける後世の篆書が、これに因つて起つたことは、云ふまでもないことである。

鐘鼎彝器の銘

三代とは、謂ふまでもなく、夏、殷、周を指し、當時の吉金に就ては、左傳、史記等にも記してあるが、間もなく散佚したと見え、漢の時には、各地の山川からこれを採掘したと云ひ、趙宋に至つては、金石研究が、一科の専門學となり、斯道の大家も少なからず、歐趙の二録、「考古」、「博古」の兩圖、「嘯堂集古錄」及び「薛氏款識」等の著書も、世に公にされた、併し是等の書に記載されたものも、今日に存するものは、殆ど無いと云つても差支ない程である。然るに清朝に至つては、金石の研究が、著しく發達

し、前に掲げた如き大家も、頻々として輩出し、それと同時に、土中より發掘さるゝもの甚だ多く、實物の蒐集これに關する著書の出版等も、空前の盛を極め、然も是れ皆な概ね宋人の未だ見ざりし所のものである。然るにこれに記されてある古籀文は、なか／＼讀み難く、殊に其の字數も、多きは「毛公鼎」の如く五百字にも達するものあり、百字以上のものは、少なくないので、學者はそれぞれ研究の結果、釋文を發表して居るが、牽強附會の説が多くて、悉く信を置くことは出来ない。是等吉金の研究に資すべき著書は、前に述べたる數種の外、試みに其の數種を掲ぐれば、左の如きものあり、尙ほ原器の拓片等を數ふれば、殆ど際限なき數に達するのである。



鄭道昭書雲峰山 (北魏)

西清古鑑

續西清古鑑

積古齋鐘鼎欵識

筠清館鐘鼎欵識

兩壘軒鐘鼎彝器圖釋

攀古樓彝器欵識

匋齋吉金錄

而してまた、天下吉金の萃とも稱すべき數種を擧ぐれば、
實に左の如きものがある。

毛公鼎 四百九十七字

召鼎 四百三字

散子盤 三百五十七字

孟鼎 二百九十一字
 克鼎 二百八十九字
 齊子仲姜罇 一百七十二字
 齊侯罇 一百六十五字
 頌敦 一百五十二字
 王孫鐘 一百十四字
 號柔子白盤 一百一十一字

然るに或る一派の學者、例せば康有爲(南海と號す)の如きは、古文を以て、悉く漢の劉歆の偽造となし、現に在る所の鐘鼎彝器は、皆な漢以後の製作に係るものとして、是等の總てを抹殺せんと試みて居る、その詳細はその著はしたる『廣藝舟雙楫』一名書鏡』を一覽すれば、直ちに

康有爲の「廣
 藝舟雙楫」

明白である、元來此康有爲と云ふ人は、清朝の學問が、徒らに考證の末に流れ、無益な死學問に、貴重な歲月を費し、支那の國勢、日に月に傾くを見て、斯くてはならぬと、大に實用の學問を起さんとするに志し、それには多くの書を読んで、終身その考證に没頭して居るやうなことでは、迎も駄目だと云ふ所から、從來儒學の寶典として尊崇されて居る、彼の十三經の如きも、論語詩經等の一二を除けば、悉く後人の假托に出でたるものとし、『新學僞經』と名くる書を著はして、盛んに實學の鼓吹に勗むるのみならず、更に進んでこれを政治に應用し、平素の考へを實現して見たいとの希望から、先づ時の事實上の主權者たりし西太后を除いて、皇帝の親政を謀ら

んことを企て、光緒帝を擁して、大に爲す所あらんとしたが、決行の間際に至つて謀計露顯し、僅かに身を以て海外に遁れ、爾來亡命の客として、中華民國の建元まで、東西南北の人となつて居た程の次第で、學問もあり、識見もあり、殊に文章に長じて居る爲め、盛名、一時は中外を壓し、天下に南海先生の名を知らざるもの無き有様であつたが、政事上の手腕は、評判ほどでなく、遂に袁世凱の爲めに致された譯である。書道に於ては、政治よりも猶ほく、數等の門外漢であつて、その書論の如きは、決して重きを爲すに足るものではない。要するに、康有爲は前にも謂つた通り、新學を建て、有用の人材を育成すると云ふのが大眼目であるから、天

下の耳目を一新するの必要上、力めて舊物の破壊を企てたので、書論の如きも、またその餘波を受けて、事の正否を顧みるに遑あらず、何でも個でも構はず、從來の説を打毀はして、これに代ふるに新説を以てせんとした。目的が既に爰に在るのであるから、その議論に無理のあるのは當然で、單に鐘鼎彝器のことばかりではない、碑品碑評、その他に於ても、牽強附會の説が、甚だ少なくない。例せば鐘鼎彝器の如き、劉歆の僞作だと斷言して置きながら、直ぐその次に自分が孔子の廟に謁して、是等の禮器を見た時の感想、及びその後の研究に就いて、左の如く述べて居る。

「吾れ壬午を以て、京兆に試みられ、中秋祭に丁かたり、恭し

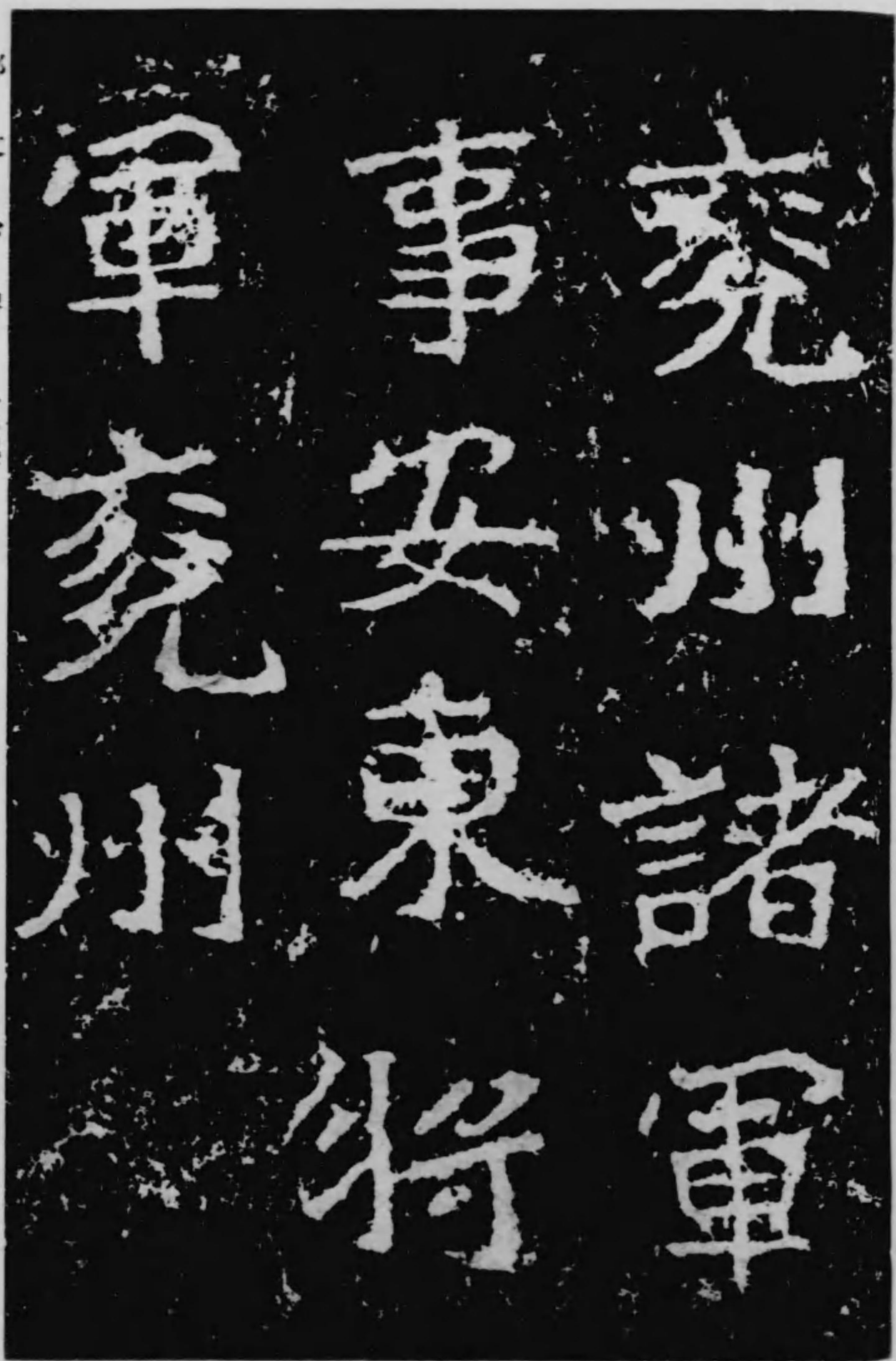
く文廟に謁し、石鼓を摩抄し、仰いで高宗純皇帝が頒つ所の彝尊十器を瞻、乃ち始めて鼎彝を講識す、南に還て楊州に遊び、焦山に入り、周の無專鼎を閲すに、闇然たる渾古、疏落欹斜、崩雲乍ち頽れ、連山忽ち起るが若く、これが爲めに心酔す。戊子再び京師に遊ぶに及び、潘尙書伯寅、盛祭酒栢義が藏する所の鐘鼎文を見るに、千を以て計へ、爛として雲錦の如く、天下の大觀なり。……鐘鼎また扁あり長あり、肥あり瘦あり、章法に疏落あり、茂密あり、隸と異なるなし、擇んで而してこれを採る、亦た河海の義なり。章法の茂密なるは、商の太己卣を以て最古となし、周の寶林鐘に至て、茂密極まれり。疏落の體は、乃ち虫篆の餘にして、隨て擧ぐれば皆な然り。

闕里孔廟の器は、商の「册父乙卣」を以て最古となし、焦山の「無專鼎」また其體なり、「楚公鐘」の奇古雄深、尤も傑作たり。長瘦の體は、楚の曾侯の鐘、吳の季子逞の劍字の若き、窄せまにして長ちゆう、婀娜の致を極め、齊侯の罇鐘銘は、銘詞五百餘字、文既に古渾、書も亦た渾美、詛楚の先驅なり云々。」（書鏡）

劉歆は有名なる「列女傳」の撰者劉向の子で、名家の出たるのみならず、また學問も深かつた人ではあるが、如何に劉歆のものでも、それが僞作と極つて居れば、それに向つて康有爲が以上の如き敬意を拂ふのが、既に不思議であるのみならず、劉歆に果してこれだけの手腕があつたとすれば、大に驚くべきことで、唯だこの一事に就ても、

新古の如何を鑑別することが出来さうなものである、現に支那全土に散在せる、同時代の鐘鼎彝器は甚だ少なくないが、これをしも悉く劉歆が造つたと云ふことは、何としても信ぜられない、殊に近來頻々として、山村水廓より發掘さるゝ同型の禮器祭器の如きは、何と解釋して宜いか、劉歆が如何に物數寄でも、眞逆かに銅器を造つて、所々へ埋めて歩いたとも思はれない、無論偽物もあるに相違ないが、それは銅器には限らぬ、何にでもあることで、深く怪しむに足らぬ、それが爲めに、總てを偽物とする理由はない。

康有爲の『廣藝舟雙楫』には、先づ以上の如き缺點がある、然るにこれを以て六朝書道の寶典となし、これに依らね



鄭文公碑 (北魏)

ば六朝書は解らぬもの、如く吹聴し、讀者もまたこれを以て、書道の門牆を窺ひ得た如くに考ふるは、甚だ以て苦々しい次第である。

從來書體の變遷を記するに、最初に古文、即ち所謂鳥跡蝌蚪の文なるものがあつて、次に籀文、即ち所謂大篆に遷るの順序になつて居るのであるが、鳥跡蝌蚪とは、果して如何なるものを指すか、今日の金石學者は、實物研究の上から見て、これを認めて居ない。

現に先年鳴鶴翁が支那に遊ばれた頃、當時金石遺文の蒐藏家として最も有名なるのみならず、又立派な金石學者であつた所の吳大澂字は清卿を、上海に訪ねられたのである、氏の所藏に係れるものは、三代の彝器ばかりでも、

數十百種もあつて、尙ほ盛んに其の歛識の文字を研究して居たのであるが、其の説に依ると、古銅器の文字には、古文と見るべきものと、籀文と見るべきものとが、互に入混つて居て、何處までが古文で、何處からが籀文だか、その區別を立てることは出来ず、中には古いものに籀文があつて、新らしい方に、却て古文らしいものゝ存して居るのもあるなど、三代の書體は、古文、籀文、兩つながら行はれて居るから、これを古籀と名づくるのが、最も適當なる名稱であらうとのことであつたさうな。

(考)

楊守敬曰く、三代古文尙し、然れども高古絶倫、變化方なし、今適用せず、且盡く識る能はず、故に漢より以來、

此れを以て家に名あるもの鮮し。

康有爲曰く、古文は劉歆の偽造にして、鐘鼎を雜採してこれを爲る、「水經注」に稱す、臨淄の人にして、齊の胡公の銅棺を發くものあり、其前に和隱起、文を爲る、惟だ三字のみ古文にして、餘は今書に同じ。子思稱す、今天下、書は文を同くすと、蓋し今の隸書は、即ち蒼頡篇中の字なり、蓋し齊魯間の文字は、孔子これを用ひ、後學これを行ひ、遂に一に定まる、鐘鼎に採る所の如きは、自から是れ春秋戰國の時の、各國の書體なり、故に詭形奇製、倉頡の篇と同じからず。許慎の説文の叙に謂ふ、諸侯政を力め、王に統せられず、言語は聲を異にし、文字は形を異にすと、今佛獨露の文字皆な異なる、以て古

を推すべし、但だこれを以て經を亂れば、則ち孔子の文字にあらず、辨ぜざる能はず、若しも筆墨を論ぜば、則ち鐘鼎は僞なりと雖も、自ら廢する能はざるのみ。

石鼓の殘字

古來籀文として、現存せる唯一のものは、周の石鼓の殘字のみとなし、其の書體も、鐘鼎文に似通ふ所があり、唐宋以來有名なる學者で、石鼓に關する詩文を作つたものも少なくないので、こればかりは、太史籀の筆に成つたもので、周の宣王が、狩に出た時の記念だと云ふことに就て、また疑ひを容れないと云ふのが、殆んど定説のやうになつて居るが、楊守敬の説に據ると、「或は以て大篆は、周の宣王の史籀に出たものとして居るが、然し説

文に載す所の籀文を以てこれに按ぶるに、殊に合はない、鄭澂滌は、以て秦時の物として居るが、これまた確たる據はない、馬定國は、以て宇文周の時の作と爲し、蘇綽は、事々古に倣ふと雖も、未だ必らずしも此の絶詣ならず、且つ此の鼓は、已に初唐李嗣眞の書品に見え、時代相近ければ、未だ必らずしも、遂に古物と目しない、近ごろ以て周の成王の時の作と爲す者もあり、稍やこれに近いであらう、常熟の楊沂孫はこれを學び、自から稱して惡劫不刊と曰つて居り、吾友吳倉石はこれを倣つて、また一時に喧傳すと曰つて居る。

鳴鶴翁も、「論書三十首」を著はされた頃には、これを史籀の遺となし、宣王大狩の時の作と爲すを以て、確據あり

として居られるが、近來は、また聊か他の方面に、研究の餘地を存して居られるやうに聞いて居る。

石鼓は、今北京國子監なる孔子廟の、大成門の左右に五個づゝ並べ、總べて五十個あるが、形は宛も太鼓の如く、その胴に當る所に文字が彫つてある、併し内一個は、磨渤して讀めなくなつて居る、傳ふる所に依れば、初め陳倉の野中にありしが、唐代にこれを鳳翔に遷し、次で宋代にこれを開封に徙し、金人これを燕京に置き、爾來元明を経て今日に至つて居るのであるが、宋の時代に、第六に當るものを失つたので、種々詮索して居ると、或る農家で、臼に用ひて居ることが分り、これを取上げたと云ふので、その凹みに乾隆帝の題字がある、其の文字の數

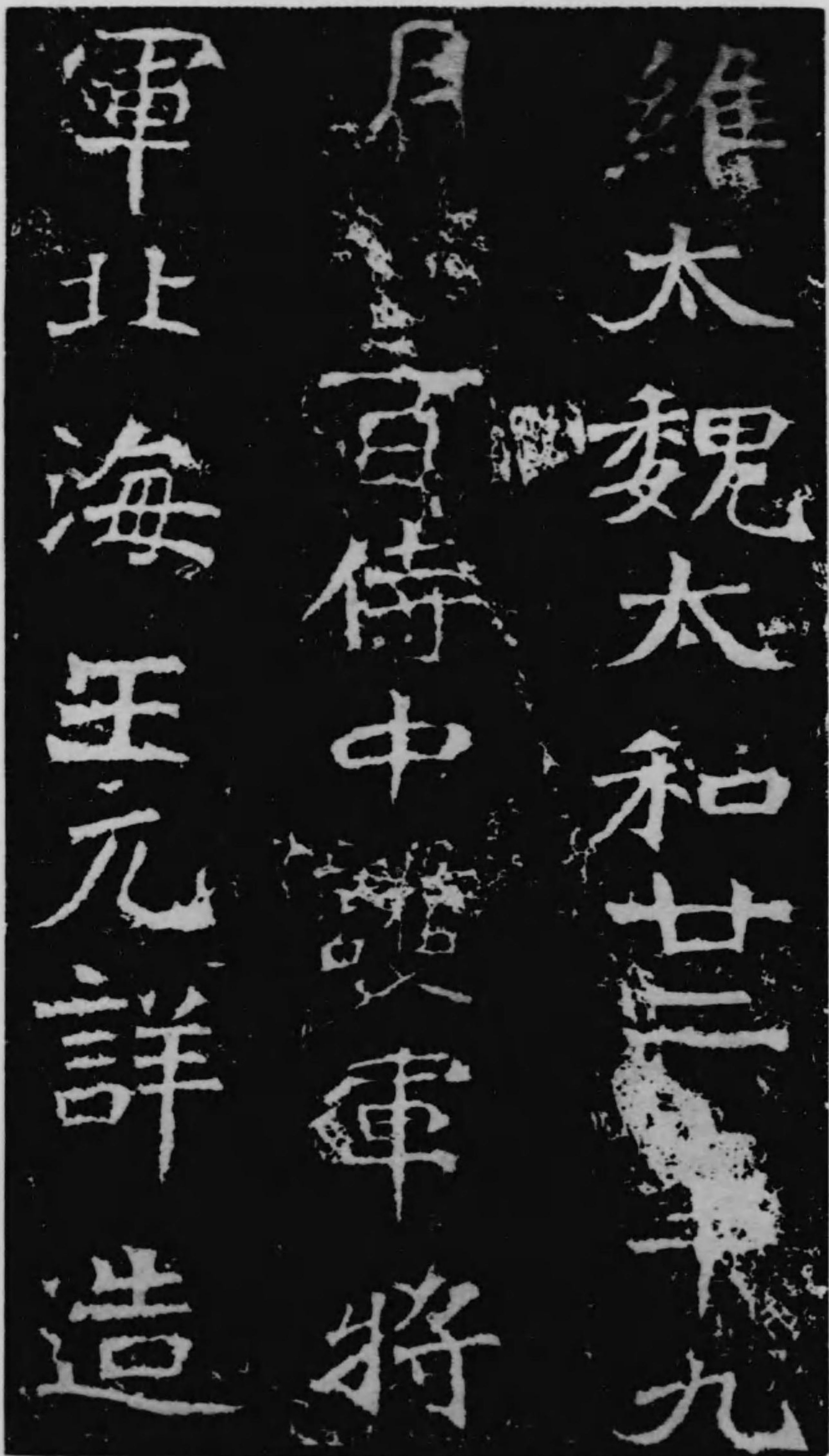
に就ては、宋の歐陽修の四百六十五字を見たりと云ふを、最も多しとし、輓近の拓本には、全字二百八十三、半渤字二十六しかない、何の爲めに斯るものを作つたのか、明白でないが、その記載してある事柄から推察するに、一種の記念碑を見たやうなものと思はれる。その大きさは、丁度腰掛けに適當する位で、最初から屋内に置いて、風雨に曝されなかつた爲めか、前に云つた一個を除く外、何れも立派に文字を讀むことが出来る、文字の大きさは、一寸二三分位もある、周の宣王と云へば、神武天皇即位紀元前百六十七年の頃で、今から數ふれば、二千七百四十五年ばかり以前に當り、誠に稀世の珍品と謂はねばならぬ。

石鼓は秦の刻する所

談が少し横路に入るが、明治三十三年北清事變の際、この國子監胡同は、我が軍の軍政區域であつて、獨逸が彼の有名なる天文臺の天球儀を、その守備區域から取外づして、本國へ運んだのを見て、日本はこの石鼓を、我が帝室博物館の保管に移しては如何との説もあつたが、事、苟も聖廟の寶器となつて居るものを、持ち去つたと云うては、甚だ穩かでないとの反對説が、勢力を占めた爲め、其のまゝに据ゑ置くことゝなつた。

(考)

毛鳳枝曰く、石刻は「石鼓文」を以て、最古また最眞となす、篆法は周秦の間にあり、古文より初めて小篆に變じたので、石鼓は、實に秦山瑯琊諸刻の先聲を爲し、其の刻石



北海王元詳（北魏龍門造像二十品の一）

は、秦が諸侯と爲つて、雍に都するの時に在り、而して刻石は則ち秦がしたのである。文章篇什は、則ち車鄰駟鐵の流にして、小戒に於て尤も近しと爲し、此の後李斯の小篆は、殆ど此から出て居る。(石刻書法源流攷) 康有爲曰く、「石鼓文」の若きは、則ち金鈿落地、芝草團雲、整截を煩はさずして、自らおのづか奇采あり、體稍や方扁にして、史籀を統觀し、氣體相近し、石鼓は既に中國第一の古物たり、また常に書家第一の法則となすべし。

二 秦

一八六

篆書は、秦に起り、始皇が、其の功業を萬世に傳へん爲め、丞相李斯をして、書して石に刻せしめたことは、歴史に記載されてあるが、現に存在せるは、「泰山」の殘石僅かに十字に過ぎず、其の餘は皆な痕迹を留めて居ない、他碑の偶々存するものは、概ね後世の摹刻である。然るに近來續々發掘さるゝ、權量等の金屬に刻せられたる篆文は、以て石刻の缺けたる所を補ふに足るのみならず、縦横變化、秦篆の妙を究むるものがある。

秦碑

秦の篆書は、籀文を大篆と云ふに對して、一般にこれを小篆と名づけ、丞相李斯の作つたものとされ、其の書と

篆書と李斯
泰山の殘石十
字

秦篆の六碑

して、史上に傳へらるゝものには、「鄒嶧山」、「泰山」、「瑯琊」之罘、「碣石」、「會稽」等の六碑があつて、何れも始皇が名山大川を巡遊した記念として建てたものである。

「嶧山」、「會稽」の二碑は、唐以前既に之を失ひ、今在る所の「嶧山碑」は、宋の淳化年間に、鄭文寶が、其の師徐鉉の臨本に由つて、石に刻して西安に建てたのであり。「會稽」は、元の申屠綱の家藏の拓本に由つて、これを覆刻したが、清の康熙年間に至りて、全く磨瑯され、今在る所のもものは、乾隆年間に、申本より更に重刻した所のものである。

「之罘」は、「汝帖」中に、僅かに其の十數字を收めてあるのみで、碑の所在は分らない。

「碣石」は、其の拓本すら、久しく見えなかつたが、宋の徐鉉が、勅を奉じて臨書したものを、清の同治六年に、江陰の吳儁が、これを雙鉤鈔板して、世に公にしたものがある、斯る次第で、其の名はあつても、何れも摹刻のみで、李斯の原石でないから、面目精神ともに、既に見るべきものはないのである。

獨り其の間に在つて、「瑯琊臺」の一碑のみは、是れまた甚だしく磨泐して、殆んど完全に讀み得る文字は無いにも拘はらず、原碑の全體を存し、字數も澤山あり、磨泐の間にも、李斯の風骨を想貌し得て、眞に無上の神品とされて居たが、惜しいかな、是れまた十年ばかり前に、雷火の爲めに粉碎され、今は片塊だも留めて居ない。

斯くて「泰山」の刻石もまた、嘗て火に燬かれて、其の缺損した跡は、稍や完全に近い文字すら、十字にも足らぬ程であるが、併しこれが現に存在せる、秦碑の唯一のものとなつて居る。

權量、詔版、瓦鐃

石に彫つた秦朝の文字は、前に述ぶるが如く、甚だ朦朧たるを免れないのであるが、金に刻したもので、秦篆を研究するに缺くべからざるものが遺つて居る、それは權量の銘文である、權とは稱錘はかりのつもりである、秦の制度では、其の稱錘の輕重が、五等に分れて居る爲めに、之を五權と云ひ、其の銘を五權の銘と云ふ。支那の金石學者には、隨分これを集めて、愛翫研究して居る人もあるが、實物

の精好なるものを手に入れることは、容易でないのみならず、古翫として、之を愛するのでなく、書を學ぶ爲めになれば、他の碑版と同じく、其の拓本を得れば足るのであるから、近頃は鼎彝の銘と共に、此の五權の銘をも、拓本となし、或は更にこれを寫眞版に取つて複寫したるものもある。鳴鶴翁が、支那で觀られたものは、斤權(十六兩を斤と爲す)、鈞權(三十斤を鈞と爲す)、石權(四鈞を石となす)の三種であつたが、其の内斤權は鑄文、鈞石の二權は鑿文で、鑿文の篆體が最も妙であつたと云ふことである。

權量の外に、詔版と瓦鐻とがある、其の篆法の圓渾古妙なる、亦た書に志あるもの、大に研究すべき所である。

(考)

楊守敬曰く、秦篆の碑刻は、泰山の殘石、瑯琊の碑刻より外、今存するものなく、漢篆の碑刻は、「嵩山少室」、「開母」の外、間々各碑の題額はあるが、また概見しない。然れども秦篆には、權量、詔版があつて、劉喜海が、これを發いてより、近日土を出づる尤も多く、山東の陳壽卿の瓦量は、新たに型を出た如く、端午橋(方)の權量は、幾數十章もあつて、實に秦篆の大觀である。漢篆には、印章、瓦當、及び諸銅器があつて、材を取ること盡きず。また王莽の十布の如きは、精勁絶倫、鐵線の祖たり、篆書を學ぶ者は、縦ひ變化を極むるも、其の範圍を出ることは出來ぬ。三國の「天璽紀功」に至つては、自ら體制を創

め、前に古人なく、後に來者もない。郭宗昌の「金石史」に、嗤つて牛鬼蛇神となせるは、眞に所謂駱駝を見て、馬腫背と謂ふのと同じである。夢英の千文の如きは、實に是れ魔道で、流俗異を好み、多くこれに效ふも、學者は斷じて涉筆すべきでない。唐人では、李少溫より外、惟だ「美原」、「神祠」の二通のみ、差や準繩がある。「碧落」の一碑を、謬つて神奇と傳ふれども、また正軌でない。

古昔諸佛所行真實非我非過佛所行法真
實四不思議何謂為四持意菩薩能令佛土
三千大千刹土盡為七寶還復如故是一不
思議如我今日處母胞胎引及无量阿僧祇
衆生不度者度不到者到除垢至无垢是二
不思議我本誓願要度若人到无苦處一苦
不度吾終不取涅槃是三不思議佛身无量

三 漢—隸

隸書は、秦の獄吏程邈が、大小篆を損益して作ったものだと言ふのであるから、秦の時代に入るべきものかも知らぬが、實際上、古隸として現に遺つて居るのは、概ね前漢の遺物で、秦時のものは、殆んど見當らない、隸書と云へば、忽ち漢の時代を聯想するやうになつて居て、また最も盛んに行はれたのであるから、之を漢に入れることゝした。

秦篆、漢隸と云へば、動かすべからざる極則となつて居る。されど前漢の古隸は、尙ほ篆書の意を存して波磔が少ない、古來「前漢に波磔なし」と云ふことが、通則の如くなつて居て、其の例証には、何時も「五鳳二年の刻石」を引いたものである。

が、先年熹燿の發掘ありし當時、明かに波磔あることを見出して以來、此の説は全く打破られた。

併し前漢には、碑數も至つて少なく、随つて書體の變遷を見るにも、甚だ不便であるが、これに反して、後漢には、碑數も至つて多く、書體もまた、篆書に隸書を兼ねたるあり、或は純然たる八分の精華を發揮したるもあり、恣態百出、面目多様、各々其の妙を究めて居る。(第一篇十九參照)

八分とは、八字分背と解すべく、隸八分に篆二分と云ふ説は、穩かならぬやうである。

前漢の古隸

同じ隸書と云つても、前漢と後漢とは、自づから姿態を異にして居て、前漢のものは所謂古隸で、何となく篆書

に近い傾きがあると云ふのであるが、何分にも、前漢の碑碣として、後世に傳つて居るものは極めて稀れにして、前に述べた「五鳳二年」「趙二十二年」等の刻石二三種に過ぎない、歐陽修の博學を以てすら、「吾家の集古、録する所、三代以來鐘鼎彝盤の銘、備さにあり、後漢に至りて、始めて碑あり、前漢の碑碣を求めんと欲するも、卒に得べからず」と稱して居るのを見れば、前漢には立碑を許さなかつたのかとも思はれるが、一説に據れば、前漢にも碑碣は無かつたのではない、然るに王莽が、漢の徳を頌することを惡んで、悉くこれを破壊せしめた、故に残つて居るものが少ないのであると、或はさうかも知れぬが、是れとて確乎たる根據のある説でもない。

從來古隸と云へば、波磔の無いものと定め、其の例証として、何時も「五鳳二年の刻石」が、引合に出された。此の石は、金の章帝の明昌元年に、詔して闕里の孔子廟を修めしめ、二年春工を起した時、工人が池中の石を以て、用に充てんとし、偶々此の石を發掘したことは、其の時の工事の主任者高德裔の記に見えて居る、其の文に「五鳳二年」とあるは、宣帝の年號で、「魯三十四年」とあるは、魯の孝王の國を有せる年記である、漢の時には、上に天子の年號を記し、下に諸侯王の、其の國を有せる年數を記すのが通例になつて居る。而して何人もこれを以て古隸の好標本として居た、然るに、世の推移と共に、各種の資料が發見され、遂に舊説を打破せらるゝに至つたと

云ふのは、此の古隸の特徴として疑はなかつた、波磔なしと云ふ説も、先年中央亞細亞の沙漠中から發掘された古蹟に由つて、全然獨斷説であつたことが解つた、現に其の發掘物の中には、之より一年前、即ち五鳳元年のものがあつて、それには明らかに波磔がある、その他にも種々波磔あるものを見出したからである、隨て古隸の標本としての「五鳳二年」の碑は從來に比して、幾分か其の權威を減殺された譯である。

今一つ同じく、前漢の碑として、殘つて居るものに、「葉子侯碑」と云ふものが、山東省鄒縣の孟子廟にある、「葉子侯」と書いてある爲めに、或は葉子侯と讀む人もある。始建國天鳳三年の建設で、清の嘉清丁丑、新たに土を出

たのであるが、康有爲は、これをも抹殺せんとし、「前漢に此の體なし、蓋し亦た偽作ならん、則ち西漢には、未だ隸體あらざるなり」と謂つて居る、されど鳴鶴翁は、嘗て此の碑を評して、「其の刻の蒼勁簡質なる、姿態の高古悠雅なる、到底後人の企て及ぶべきものでなく、殊に捺筆の所に、微波を生じて居るなど、蓋し古隸から八分に遷るの漸を示したものである」と謂はれた如く、例の中央亞細亞に於ける、史料の發掘に由つて、康有爲の此の臆説は、根柢から顛覆されて仕舞つた、則ちこれより前二年、天鳳元年の號ある木簡の眞蹟があつて、遺憾なく八分の體を發揮して居るからである。

流沙發掘の木簡書

前漢に波磔なしとの、古來の定論を破つて、漢代の書史に、一新生面を開くの資料として、木簡書の眞蹟を與へたる、中央亞細亞の發掘談は、こゝに特筆大書するの必要がある。

抑も中央亞細亞新疆省天山南北から、タクラマカンの盆地にかけては、古來流沙の絶域として、何人も顧みなかつたのであるが、此に記憶すべきは、沙漠の丘谷が一朝一夜の間に其の地位を變じ、それが爲めに、旅行者を生埋にすることは勿論、附近の都市をもこれが爲めに、埋没して跡を留めないことである。

タクラマカンは、古代に於ける、東西兩洋の交通地で、漢の時代に、羅馬帝國との接觸が頻繁であつたことは、

今日の東洋研究者の、何れも認むる所であるのみならず、現に「史記」の西南夷傳、「漢書」の地理誌等にも、支那西部に國をなして居たものが、直接間接に東西互に相往復して居たことを記し、漢の張騫が、西域に使ひした事實もあり、此の地方が交通の衝に當つて居たことは、想像に難からぬ所で、本書の主要問題たる「木簡」と密接な關係を有する所は、タクラマカンの盆地のうち、ロブ湖水の畔域に、ニヤと云ふ所があつて、木簡は此處から出たのである、湖邊一帶、漢の時代には、樓蘭國の故地であつて、今から千八百年前の頃は、相當に文化の土地であつたと見え、王莽時代の記録が、盛んに發掘され、歐洲の東洋學者は、この發掘の事情に通じて居なくては、

寶墨軒藏帖

唐智永禪師書

天地玄黃
宇宙洪荒
日月

智永楷草千字文 (唐)

未だ東洋を語るに足らずとまでされて居る位であるが、我邦ではこれを聞いて、一部の學者好事家が、鳥渡驚いた位なことで、僅かに本願寺の大谷伯が、橘瑞超氏を遣つて、西洋人の發掘した跡を搜して來た位のことである。此處に埋没して居た史料は、其の年代から數ふれば、少なくも千年以上、二千年前後の星霜を経たもので、此の長年月の間、紙とか、絹縑とか、布帛とか、木簡とか云ふやうな、腐朽の性質を帯びて居るものが、完全に保存されたことは、不思議なやうであるが、氣象學上から見て、此のタクラマカンの盆地は、殆んど雨の無い沙漠の一區域であるから、沙地の底まで、水分は云ふに及ばず、有機質を腐朽せしむる、何等の成分をも含まず、地中は

乾燥しきつて、而も空氣も入らない爲めであつたらうと云ふことで、現に木簡の如きも、其の割れ目、裂け目に至るまで、舊態依然として、中にも樹皮を存するもの、如き、其の樹皮の生々しきこと、宛から昨今のものと思はるゝのもあるとのことである。

扱て此の木簡は、中央探検の大立物たる、英國人オーレル・スタインが、政府の保護を得て、其の探検中に、發見したもので、發掘より得たるは、單に木簡に止まらず、佛敎藝術に關す材料、壁畫、其の他考古學上の重要なる資料も少なくなかつたので、前後三回の大發掘を斷行し、曩に佛人に由つて行はれた、前の燉煌の發掘よりは、規模も大きく、是等の獲得物は、大英博物館に於て、整理

木簡發見者英人スタイン

木簡に關する著書

中とのことである。

此の木簡に關する記事は、ドキュエーメン・シノア(支那古文書)と稱し、スタイン及び佛人エドワード・セベンの共著となり、一九一三年、英國オクスフォードから出版した、本文は二三二頁、圖版三七頁、九七六片と算せられ、羅振玉が「流沙墜簡」として發行したのも、これを分類複寫したに過ぎないのである。

木簡の材料は、松柏科に屬する木で、これを尺度の形となし、長きは一尺内外より、一尺五寸以上のものもあり、短きは四五寸にも足りない、幅は四五分より、二寸以上に達するものもある、此の木簡は、一端に孔のあるのを見れば、幾枚も重ねて使用し、これを綴つたものらしい、

木簡の材料

其の形は、概ね長方形であるが、中には一端を半圓形に作つて、圓首の形としたものもある。

本簡に記載したる事柄は、枚舉に違あらざる程だが、其の例として、左の十數種を掲げて見よう。

一、干支曆日を記するもの

『八月丁亥小』

『廿八日、己己、戊戌、丁酉、丁卯、丙申、丙寅』

二、年號と事件とを記するもの

『神爵元年罷卒□留□所虻矢奉弦□』

『神爵四年繕』

『神爵元年寺工造』

『五鳳元年七月丁己朔戊午獻胡隊長警』

『五鳳二年正月甲寅云々』

三、物品目錄を記するもの

『臯布袍一領』

『白練褰袍一領』

『五石具努一』

『豪矢銅鏃百』

四、尺積を記するもの

『四人馬夫塗□□長四丈九尺廣六尺積二百九十四尺』

五、奉書行事を記するもの

『燉煌太守常樂長史中略奉書行事下當用者如詔』

六、叩頭死罪を記するもの

『叩頭死罪死罪日庚辰□不病□壬午病發』

『北部候長高長高翼頓首死罪明言之』

七、始建國のことを記するもの

『獲斷金利焉、始建國四年五月己丑下』

『始建國天鳳元年玉門大煎都兵守望折傷簿』

『始建國天鳳三年二月十三日菜子倍爲支人象封使儲子

食等用餘人後子孫母壞敗』

八、算數を記するもの

『九九八十一、八八六十四、五七三十五、二六十二、

二三而而六』

『八九七十二、七八五十六、四七二十八、五五廿五、

二二而四』

九、頃畝を記するもの

『大麥二頃已截廿畝』

『小麥卅畝已截廿九畝』

『禾一頃八十五畝漑廿畝筋九十畝』

十、樓蘭國のことを記するもの

『樓蘭以白云々』

十一、西域長史のことを記するもの

『西域長史文書郎中闕』

『西域長史張君坐前』

『西域長史承移令初除月廿三日當上路從上却至天水』

十二、急就章を記するもの

『急就奇觚與衆異』

此の木簡に記されたる書體は、本書の「書鑑」中に掲げ

たる如く、如何に奇古精妙にして、また無邪氣に、無造作に書かれたるかを知るべく、殊に其の波磔の、縦横共に顯著にして、八分の書體は後漢を待たず、其の前已に遺憾なく發展し、且つ一般に使用されて居たるを證明することである。

(考)

毛鳳枝曰く、西漢の篆法は、瓦當文を極めて精美となし、此の外は、「祝其卿」、「上公府卿」の墳壇刻石十餘字の、曲阜孔廟に在り、新莽が居攝の時に刻する所の者が、茂密圓渾であるが、而も剛勁の氣は、斯翁に遜る。

又曰く、五鳳二年「魯孝王」の刻石、始建國天鳳元年「萊子侯」の刻石の如きは、皆な古隸に係り、篆書ではない。

大唐故汝南公之墓誌銘
公諱字攏西狄道人
皇帝之第三女也天潢疏濬園
夜光未若木分輝
朝陽之宅故能聽穎外
開明內



虞世南書汝南公主碑 (唐)

後漢に立碑多し

孔廟禮器碑

開通褒斜道碑

後漢初期の書體

後漢に至つては、各地廟宇の建碑を始め、門生故吏が、競うて其の府主の徳を頌し、立碑郡邑に遍ねく、見存のものゝみにても、無慮百餘に達し、姿態縦横、眞に刻石の盛を極め、字體は隸書を用ひて居るのであるが、それと同時に、其の隸書には、誤字が少なくないとして、これを正す爲めに、許慎は、「說文解字」十五篇を著はしたと云ふことである。

潘儒初の説に據れば、「孔廟禮器碑」は、方整峻潔であつて、宛も楷書に「廟堂」「醴泉」あるが如く、自づからは隸分書の正宗である、然れども「郗君開通褒斜道碑」の縦横排募なる、「元初三公山碑」の體、篆分を兼ねたる、

「西狭頌」の方整なる、「武榮」、「鄭固」の淳古なる、「石門頌」の飄逸なるが如き、各々面貌があつて、各々妙境に臻つて居る所は、皆な後人の能く凝議すべき所でない、此の數語は、則ち漢碑の梗概を盡したものと云ふべきである。「禮器」は、王翦材が、力を極めて、これを推崇して以來、遂に漢分第一となつたのであるが、「開通褒斜」は、楊守敬の所謂、其の字體廣狹參差齊しからず、天然の古秀、宛も石紋の如く、百代以下、從て摹擬するものなし、之を神品と謂ふと曰つて居る程の文字で、碑は現に陝西省褒城の石門に在り、永平四年の建造に係る。又「紀三公山碑」は、篆書に隸書を兼ねたる一種の奇作であり、「嵩嶽三闕銘」は、漢代に於ける唯一の篆書と云ふべく、

李斯の筆意を窺ふに足るべきは、此の碑を措いて、他に求むることは出来ない。嵩嶽三闕とは、「嵩嶽太室神道石闕」「同少室石闕」「同開母廟石闕」の三つを云ふので、太室は、元初五年四月、呂常これを造り、河南省登封府嵩山に在り、少室は、登封府の西十里、刑家舗の西南に在り、開母は、延光二年の作で、登封府の北十里、崇福觀にある。

其の他尙ほ、前漢古隸の風を窺ふべきものに、「敦煌太守裴岑紀功碑」がある、之は順帝の永和年間に建設したもので、波磔を以て特色とする後漢の八分とは、遙かに其の書體を異にして居る。後漢の特色として、専ら波磔を逞うする所の八分は、此

の以後盛んに行はれたものである。八分とは隸書八分に、篆書二分が加つて居る所から、斯く名づけたと云ふ説もあるが、それに就て、鳴鶴翁も、唯だ八分と云ふだけでは、隸書が八分だか、篆書が八分だか、それも解らないし、第一其の特色たる波磔に對して、何等の關係がない、之は矢張り八字分背と云ふ所から、八分と云ふ名が起つたと云ふ説の方が、宜からうと謂つて居られた。

(考)

八分に關する諸説

蔡文姬
王愷

蔡文姬は、父邕の語を述べて曰く、隸の八分を去つて、二分を取り、小篆の二分を去つて、八分を取る。王愷曰く、王次冲は始め以へらく、古書方にして廣く、

張懷瓘

波勢少なしと、建初中、隸草を以て楷法を作る、字方八分なり。張懷瓘曰く、八分は、小篆の半を減じ、隸また八分の半を減ず。

蔡希綜

又云ふ、八分は則ち小篆の捷、隸また八分の捷なり。蔡希綜曰く、上谷の王次冲は、隸書を以て、改めて楷法と爲し、また楷法を以て八分に變ず。

王應麟

王應麟曰く、唐より以前は、皆な楷字を謂うて隸と爲した、歐陽公の「集古錄」に、始めて誤つて八分を以て隸と爲し、東魏の「大覺寺碑」は、題して隸書と曰ふも、蓋し今の楷字である、洪邁は晚漢の隸書を以て八分と爲し、吾邱衍は、秦權漢量を以て、秦隸と爲し、未だ挑法あらざる

ものを八分と爲し、漢隸に比すれば則ち篆に似、石經を以て漢隸の挑法あるものと爲す。

包世臣曰く、凡そ筆が、篆に近くして、而して體の眞に近きものは隸書である、中郎は、隸を變じて八分を作つた、八とは背くとの意味である、其の勢ひが、左右に分布して、相背くを言うたものである。

康有爲曰く、王愷、蕭子良は謂へらく、上谷の王次冲は八分を作ると、衛恒は云ふ、上谷の王次冲は、始めて楷法を作ると、又叙梁鵠の弟子毛宏始は云ふ、今の八分は皆な宏の法なりと、按ずるに梁鵠は、已に魏の時に在り、毛宏は更に後ちである、若しも毛宏始が、八分を作つたとすれば、則ち漢魏の挑法あるもので、石經等の碑は、

已にこれを備へて居る、若しも包氏の説の如く、中郎が始めて隸を變じて、八分を作つたとすれば、則ち中郎の前に、「王稚子闕嵩高銘」、「封龍山」、「乙瑛等の碑には、已に挑法があるから、何も中郎を待つて、これを變ずるには及ばない、且つ中郎の「勸學篇」に云ふ、王次冲初めて古形を變ず、則ち邕の知る可きにあらざるなりと、若しも吾邱衍の如く、篆の未だ挑法あらざるものを以て八分とすれば、則ち張昶の八分碑乃ち「華岳碑」、衛覬の金針八分書、及び「受禪表」は、皆な挑法あり、若しも王氏の説に従はゞ、今の楷書を以て隸書と爲し、漢人の書を以て八分と爲し、「集古録」に、漢人の書を隸と曰つたのを誤りと爲れば、則ち「序仙記」に、王次冲は、蒼頡を變じて、皆な今の隸書と

爲すを稱せば、則ち八分を謂つて隸と爲せるもまた可にして、歐陽永叔もまた誤つたことにはならない。王次冲が、八分を作つたことに就て、張懷瓘は「序仙記」に従ひ、以て始皇の時の人と爲し、王愷は、以て建初の時の人と爲し、蕭子良は、以て靈帝の時の人と爲す、何れが是なるや、辨ずるとは出来ぬが、挑法のある隸は、安和の時に起つたので、また必らず建初前の人たるべく、靈帝の時の人ではない、然れども建武の時の、「三老尊棧郟縣」の石刻の筆法には、已に漢隸の體があるとして見れば、則ち次冲の作と云ふとも、亦た据^ることは出来ない。張懷瓘の「書斷」に又云ふ、楷隸の初制は、大範幾んど同じく、後人これに惑ひ、學者益々高深ならんことを務め、

漸く八字の如くに分散し、またこれを八分と名づく、高南阜の八分説に、漢の末伯喈が始めて掠捺を添へ、八字左右にして、これを分布した、是れを八分と爲す、分別の分であつて、分數の分ではない。

翁方綱の「隸八分考」は、此の兩説に據り、説文の八字の條を引き、八は別なり、分別して相背くの形を象るとなし、并せて𠄎の字、詹の字、余の字に、八の字の義あることを引き、以て必らず分別、分列と爲して解すべしとす。

康有爲曰く、劉歆僞つて篆隸の名を爲り、以てこれを乱る、古は書をたゞ文と曰ふ、音に篆隸の名なきのみならず、籀の名もまた西漢に稱せられず、唯だ時々轉變して

形體少しく異なり、舊日の八分を得たり、因つて八分を以て名となせり、例へば秦篆は「石鼓」の體を變じて、其の八分を得、西漢人は、秦篆の長體を變じて扁體となし、亦た秦篆の八分を得、東漢また西漢を變じて挑法を増し、且つ極めて扁、又西漢の八分を得たと云ふ如く、八分とは通稱と爲すべきものなり、(顧ふに康有爲の此の説は、最初の篆八分隸二分と云ふ説を、更に各體に應用したので、鳥渡面白いやうではあるが、通稱になつて仕舞つたのでは、特に一體の名稱として、何等の意味をも爲さぬことになり、甚だ變な譯である、これは矢張り八字分背と云ふことで、隸書の波磔あるものを稱するとするのが、適當であらうと思ふ)。

八分の妙境

楊孟文石門頌
楊淮表記

縦横古拙、東漢人の傑作、漢分の妙境と云ふべきは、「楊孟文石門頌」及び「楊淮表記」であつて、共に陝西省褒城の東北五里、褒斜谷石門の厓にあり、字畫皆な石勢に因て之をなし、書味津々として掬すべきものがある。併し古來漢隸の第一と稱せられ、最も名高いものは、魯相韓勅が、孔子廟の禮器を造つた謂はれを記し、碑陰には、當時の義捐者の姓名を録した所の「孔廟禮器碑」である、此の碑は、山東省曲阜の孔子廟に在り、所謂性情形質、二つながら兼ね備へた所の、八分書中の傑作である。

漢隸の名家たる蔡邕が、得意の筆として傳へらるゝもの

孔廟禮器碑

に、「漢廓有道先生之碑」一に「郭太碑」、又は「郭林宗碑」と云ふものがある。建寧二年に建てられた原碑は、夙に亡びて、其の拓本すら絶無僅有であるのみならず、同人の手になる、有名なる「漢の石經」も、原碑は云ふ迄もなく、宋拓の殘本と云ふのが、漸く三本だけ、宇内に遺つて居る。是等は固より隸書を學ぶものゝ、必らず觀るべき書であるが、また「武都太守李翁西狹頌」と云ふものがあつて、其の書風は、方勁雄偉、截鐵、折刀頭と稱し、鐵を截り、刀を折つたやうな、一種險勁の風氣を開いたもので、魏晉に於ける此の書風の源を爲すものである。

(考)

楊守敬曰く、「曹全碑」の流美なる、「白石神君碑」の柔潤なる、已に漢季のことゝて、古意稍や漓しと云ふべく、力めてこれを學んだ姚伯昂が、遂に次乘に落つるを免れない所以は、此にある。

毛鳳枝曰く、東漢の初め、「郗君開石門道記」、「裴岑紀功碑」、「北海相景君銘」は均しく古隸の遺意を得て居る。其の後楷法が既に興つて、字體益々精整に至り、東漢の八分は、遂に千古の勝を擅にし、其の時の、碑額の篆法にも、亦た觀るべきものが多い。「西狹頌」の額、「惠安西表」の四字、「孔彪」、「張遷」、「景君銘」、「韓仁銘」の諸碑額、及び「尹宙碑」の額、「從銘」の二字は、均しく茂密で、曹魏の「廬江太守范式碑」の額の、篆法また極めて佳である。

四 三國—隸楷

三國とは、云ふ迄もなく、魏、吳、蜀の三國であるが、魏の建安十年に、武帝が令を下して立碑を禁じたと共に、年代も長くなかつたのと、戦亂が打續いて、金石などには、意を留むる暇がなかつた爲めでもあらう、碑碣の數も至つて少なく、僅に魏の「黃初殘碑」、一に「郃陽十三殘字碑」とも稱へ、それも今は一字を減じて十二字になつて居るものが、存して居る位なとである、併し此の碑は字數は僅かでも、此の時代に於ける、書風の變遷を窺ふに足るべき大切のもので、前に述べた所の「西陝頌」あたりの系統を引き、更に其の特徴を進め、方勁截鐵の諸法を遺憾なく發揮したもので、後來北魏に於ける

魏黃初殘碑

此の風格の先驅となつて居る。

吳には「天發神讖碑」と云ふものがある、これは吳の天璽元年に建てられたものであるから、一に「吳天璽紀功碑」とも稱せられ、其の書體は、篆書に隸書を混ぜたやうな、一種特別なもので、用筆も方圓兼ね備はり、奇偉を以て世を驚かして居る、碑は既に亡滅したが、拓本のみは残つて居る、外に「九真太守谷朗碑」と云ふのがあつた、此等は隸楷中間の書體とも稱すべきもので、當時隸書から、徐々に楷書に遷つて行く所の有様を知ることが出来る。

爰に一つ述べて置かねばならぬのは、魏の鍾繇のことで、鍾繇の書いた碑文は、一つもないが、法帖には、「賀捷」

吳天璽紀功碑

谷朗碑

「宣示」、「薦季直」、「丙舍」等の各帖があつて、帖學派の方から云へば、隨分八釜敷いものになつて居る。

鍾繇(魏人)

名は繇、字は元常、潁川長社の人で、書を喜び、曹喜、蔡邕、劉德昇を師とし、眞書絶世、點畫の間、多く異趣あり、秦漢以來第一と稱せられ、又、王羲之の師と見るべき人であるが、此の人の書名は、文章に残つて居ると、これに對照すべき刻帖あるに止まり、何故か碑刻がない爲めに、所謂轉々重摹、覆刻又覆刻、何れが果して繇の眞相であるか、今日に至つては、これを知ることが出来ない、故に定めし能手であつたらうと想像するだけのこと、其の書品の如何を斷定することは出来ない、

鍾繇の眞相は知るべからず

乎九成之宮此則
隨之仁壽宮也冠
山抗殿絶壑為池

歐陽詢九成宮醴泉銘 (唐)

鳴鶴翁もまた嘗て、然か謂はれて居たことがある。

(考)

毛鳳枝曰く、楷法は鍾繇に始まり、其の書する所の「受禪碑」「上尊號奏」は、隸書に係るけれども、實は楷筆多く、而も隸法は、楷書の精なるに如かず、元常は隸書に於て、別に一格を創め、曹魏より齊隋に至り、以て唐人殷仲容等に及ぶまで、相承けて改めず、一手に出るが如く、實は元常に本づき、而して曹魏南北朝より、隋唐に及ぶまで、凡そ隸書の碑は、皆な楷書の遒麗なるに及ばない、惟だ曹魏の「孔羨碑」は、結體方整にして、意味深厚に、較や「尊號」「受禪」の二碑に勝つて居る。

宣示表(鍾繇正書) 有名の帖也、南齊の王僧虔が書に依

れば、此表丞相始興の寶愛たり、喪亂狼狽の際には、猶ほ此表を衣帯に挿み、過江の後、王右軍の處に在り、右軍之を王修に借す、修死す、其母、其子の平生愛する所たるを以て、之を棺中に納め、遂に傳はらず、傳る所のものは、右軍の別臨本にして、梁の武帝が謂はゆる勢巧みに形察して自運に勝るものなりと云へり。楊守敬曰く、閣帖に之を載せ、翻まする者また多し、余は南海伍氏の藏する宋拓大觀帖を見たるに、絶ははだ精し、嘉慶の間、張叔未、曾て一本を得、また佳、惜むらくは流傳の廣からざるを。

薦季直表鍾繇正書 至元甲子分湖の陸行直、字は季道、高價を以て方外の友より之れ購ひ、之を失ふ事廿六年、

至元九年、又之を得、上に河東薛紹彭印あり、明朝に至り、沈石田の家藏たり、或は疑て唐人の書となせり。楊守敬曰く、此の帖は元の時始めて出づ、眞賞齋これを刻す、王良常が、史を以て考ふるに、殊に合はず、或は以て李伯の時の作と爲す。

賀捷表鍾繇正書 歐陽修並に董道は、之を以て鍾繇の書に非ずとせり。然れども世に王羲之の臨寫として傳ふるものあるを見れば、原本必ずしも僞作と云ふべからざるが如し。楊守敬曰く、鬱岡齋これを刻す、結體古なりと雖も、頗る倣作の氣あるを嫌ふ。

丙舍帖鍾繇正書 原跡存するなし、張彥遠云ふ、王右軍晩年に之を臨す、筆法彌老ゆと、墨本呂靖公の家に在

りしを、薛紹彭兩紙を摹し得たりと云へり。

五 南北朝—楷行草

支那六朝の藝術と云へば、自づから一種の風氣を存して、範を後世に示すに足るのであるが、其の六朝とは、歴史上に所謂南北朝のことであつて、書道に於ても、最も注目すべき時代である。

三國の後を承けて帝となつたのは、晋であつて、後ち南北朝を統一したのは、隋であるから、正しく云へば、別に晋代を置き、又隋代を置くべきであらうが、書道の變遷から云へば、これを南北朝に合した方が、説明上便利なる爲め、これを南北朝の章に入るゝことゝした。扱て説明の順序として、南北朝に就ての概要を語れば、晋の懷帝の時、匈奴の劉淵の子聰が、晋を侵して洛陽を陥れ

て、國を漢と號して居たが、それと同時に司馬懿の曾孫容は、新に江南に國を建て、東晋と名づけ、爰に南北對立の姿となり、南方なる東晋の後には、宋、齊、梁、陳と續き、北方なる漢の後には、後魏、即ち北魏がこれに代り、更に西魏、東魏と分れ、西魏の後には北周となり、東魏の後には北齊となり、後ち陳と共に、隋に并せられ、南北始めて一統する譯である。此の時代は清談の流行と共に、道教も行はれ、佛教も廣く流布したので、其の影響が各種の方面に及んだことも、また記憶すべきである。

晋代の名蹟

晋には、王羲之、王獻之と云ふ、第一流の大家があるので、古今多くの人々が、それに就て幾多の説を爲して居るが、

二王の神妙な

肝腎な筆蹟がない、今日傳ふる所の法帖に在る二王の文字は、屢々謂ふが如く、重摹覆刻、また其の眞を窺ふことは出来ぬ、惜しいことであるが致方がない、同じ時代の「爨寶子碑」などを視るに、八分より楷書に遷らんとする時代であるから、斯くあるべきことで、法帖の文字が、羲獻の眞相を傳へて居ないことが察せられる。併しまた、摹刻とは云へ、例へば「蘭亭叙」の如き、脱字を補つた所などは、何れの帖も同様である所から推測するに、亦た全くの偽物でなく、其の間に自づから一道の脈絡を髣髴することもあるゆゑ、法帖と雖も、強ちこれを蔑視して顧みない譯には往かぬ。

羲獻の眞相如何

○

鳴鶴

禊序一篇希世寶 龍跳虎臥又鸞騰

大唐天子真癡絕 生賺孤僧死殉陵 大王

良冶何人克繼裘 衛鍾歐米豈同儔

千秋獨有王家子 占得臨池第一流 小王

鑿寶子碑

晋の碑として、今日に存する最古のものは、「振威將軍建寧太守鑿寶子墓碑」であつて、大亨四年の作に係り、其の碑は雲南省南寧城の南七十里、揚旗田と云ふ所に在り、清の道光年間に始めて世に知られたものであるが、其の書體は、正書即ち楷書の部類に屬すべきものとは云へ、まだ餘程多く隸書の筆意を含んで居て、北魏の「中岳嵩高靈廟碑」などと、甚だよく似て居る、然もこれは「南帖

中岳靈廟碑

北碑の論を唱道せる、阮元に依つて訪得され、稱して「雲南第一の古石」と曰つたほどの珍らしいもの、無論原碑であつて、覆刻でないこと、及び其の前後に於ける書體の關係から考へて見ても、此の時代の書體は、斯くあるべきものだと思はれる。

然るに不思議なるは、法帖に残つて居る晋人の書體が、之と違つて居ることである、晋朝の書家には、種々な人もあるが、世間に最もよく知られて居る所の、王羲之、王獻之等を以て、此の碑の字と比較して見る時は、其の差の著しいことが解かる。之は碑學派と帖學派と、意見の分るゝ所でもあるから、充分研究するの必要がある。王羲之（晋人）

碑と帖とは書風合せず

名は羲之、字は逸少、瑯琊臨沂の人で、右軍將軍に任ぜられ、會稽の内史となつた、書に於ては、諸體可ならざるなく、特に草書に妙を得て草聖の名がある。唐の太宗は、頗る羲之の書を喜び、天下に令して悉く之を宮中に集めたので、爾來其名益々世に高く、苟も書と云へば、必らず羲之を宗とせざるものなき有様に至り、我國に於ても、羲之と書いて、之を「テシ」とさへ讀ませる程であつた、而して其書は悉く帖中に收められ、金石には上つて居ない爲めに、我國は云ふに及ばず、支那に於ても、専ら帖に據て之を研究したのであるが、近來碑學の盛なると共に、帖學が稍や衰ふる氣味になつたと云ふのは、碑版の文字は、筆で書いたものを、石に移したゞけで、所

謂一間の差に過ぎないけれども、法帖に至つては、爾來幾度か之を繅刻して、遂に眞を傳ふるものが、甚だ稀になつて居るからである。
羲之は楷行草の三體を書いたゞけで、隸書も篆書も書かなかつたと見え、それは今日に傳つて居ない、併し今日に傳つて居る羲之の字と云ふものは、前にも云ふ通り、幾度か轉摹を経たもので、其轉摹する毎に、筆者の流儀が幾分つゞか之に加はり、其度の重なるに隨て、遂に眞を失ふに至つたものらしい、殊に細楷の如きに至ては、之を雙鈎に取れば、それだけで既に中の方が黒くなる程なれば、點畫波磔等、微妙の點を傳ふる能はずして、眞を失ひ易きも無理は無い、多くは唐人の臨摹に係るもの

であるが、其唐人の臨摹したものすら、完全に傳つて居ない。例へば「樂毅論」の如きも、種々なものがあつて、何れが果して眞に近いか、之を定めることすら六ヶ敷い。所が我國には、光明皇后の書として傳へらるゝ樂毅論が一本ある、これは非常によく出来たものであるが、果して皇后の書とすれば、其の原本とせられたものは、屹度立派なものであつて、それには皇后の書の如く、文字の大、小等もあり、大に唐人の筆意を、傳ふるに足るものがある。つたらうと想像される、或人は世に皇后の書と稱せらるゝものが、即ち唐人の書であつて、其の終りに書いてある「藤三娘」の三字は、字體も違つて居り、本文とは紙も別になつて居る所を見れば、事に依れば、所藏のしるしに

認められたものかも知れぬと云つたものもあるが、併し皇后の筆として紛れなき「佛足跡之記」を見るに、其の書風の、如何にも氣品の高い所などより推して、「樂毅論」を皇后の書かれたものでないと斷言することは出来ない。又「蘭亭叙」の如き、歐陽詢の臨摹したと稱せらるゝ定武蘭亭だけでも、「當時士大夫、家毎に蘭亭一本を刻す」と云ふが如く、其の多きこと推して知るべく、殆んど幾百種に上り、精粗錯雜、良否混同して居るから、其の中より精良なものを撰り出すことは、中々容易でない、其の他の諸帖も、概ね其の通りであるから、遺憾ながら今日の法帖を見て、直ちに之れが羲之の書風であるとは斷言することは出来ないが、他の「爨寶子碑」の如き原碑と

比較して異同
を驗せよ

二三八

對照し、尙ほ同時代前後の書體と比較して、之を研究したならば、大に得る所があるであらう。それに就て、また爰に注意すべきは、其の幾百種の多きに達して居る蘭亭にも、鳴鶴翁の謂はるゝ如く、文字の大小、行側の書入れ等、自から一様に出て居る所もあるから、是等を綜合して研究する時は、羲之の書體が、如何なるものであつたかを彷彿することは、必らずしも出來ない譯ではなからうと思はれる。

元來王家は、書の手筋は善い、字に就ての遺傳がある、羲之七代の孫、智永禪師の如きも甚だ能書である。

王羲之の筆蹟として傳はるもの、我國に於ては、法隆寺の獻物帖に、其數は三十幾種も擧げてあるが、名稱が記

御物の羲之雙
鉤本

雙鉤填墨は唐
人の妙技

してない爲めに、如何なるものがあつたか、知ることは出來ぬが、現に御物として傳はつて居るのは、唯一つの尺牘帖である、併し此筆跡と云ふのも、實は唐人の雙鉤填墨たることは疑ひないので、羲之が眞に筆を執つて書いたものではない、而も其の尊重せざるを得ざる所以は、此の填墨たる、誠に巧みなもので、墨色の濃淡潤渴は云ふも更なり、常に填墨の一大缺點とされて居る所の筆勢を損することなく、如何にも上手に出來て居て、其の方方は唐人に限つて之を能くし、宋以後にはそれが傳つて居ない爲めである。

先年これを精巧なるコロタイプに附して、世に公にされたのであるが、能く／＼之を視ると、「頗有哀禍」の「禍」の字

の右の處に、毛よりも細い雙鈎の痕を認めることが出来る、雙鈎填墨でありながら、字を殺さぬ様にした手腕は、如何にも妙である。最も同じ唐人の填墨にも、巧拙種々あるので、必らずしも悉く巧みなどは云へぬ、近來一二の好事家が、餘程の高價を拂つて得たと云ふものも、此の御物とは、迎も較べ物にならぬほど、拙劣である。

(考)

楊守敬曰く、秦の小篆、漢の八分、各々極則に臻る、魏晉以降、行草が代つて興り、篆と分とは、遂に微となつた、然れども右軍の草隸に工みなる、云ふ所の隸とは、即ち今の楷書のことである、而して世に傳ふる「樂毅論」、「黃庭經」、「東方像贊」、「曹娥碑」などの小楷は、結體が分書と

右軍の小楷



孟法師碑銘
觀夫太陽始旦指嶺
其若馳巨川分派赴渤
解而不息是以至人無

褚遂良孟法師碑銘 (唐)

迥かに異なつて居る、今晉の「爨寶子」、劉宋の「爨龍顏」、前秦の「劉太尉」、「張產碑」を見るに、明かに是れ分より楷に變る所の漸である、しかも王右軍の楷書とは、古今の別がある、ゆゑに近來の學者は、右軍の諸小楷は、宋人の僞作たることを疑ひ、但だ六朝の碑碣を以て憑とする、然れども鍾繇の「宣示」、「賀捷」、亦た分書の遺意あるに似て居る所を以てすれば、右軍の手迹は、展轉傳摹して、遂に眞を失ふに至らしめたものであらう、未だ盡く喘つて僞とすべきではない。

樂毅論(王羲之小楷) 河南書目に云ふ、「四十三行、官奴に付す」と。又王羲之の筆論に、子敬に語て云ふ、吾れ「樂毅論」一篇を書して子に貽り、之を藏せしむ、外に播する

勿れ、樂毅の法は、王氏累世此を學んで成るを得、學び難きを以て自から惰る勿れ、此日丹陽の僧あり、吾に求むれども與へずと。智永は、「樂毅論」の後に題して云ふ、「樂毅論は、正書第一、梁世摹出、天下之を珍とす、蕭阮の流より臨學せざるなし、陳の天嘉中、人得て以て文帝に獻ず、帝始興王に賜ふ、吾昔し其妙を聞き、今其珍を覩る、閱玩良や久し、始興薨する後は、廢帝に屬し、廢帝歿して餘杭公主に屬す、陳の諸王求むれども與へず、天下一統に及び、處々を追尋する累歳にして漸く之れを得たり」と。「負暄野錄」に云ふ、無錫徐氏の家に藏する「樂毅論」の碑石、たゞ五塊を存す、見るべきもの、一百八十九字、皆木匣鐵束を用ひ、甚だ之を寶愛す、徐氏の先世、

名は績、字は君徽なるものあり、劉公敞原父の妹婿たり、常に原父と金石を評論せるが、此碑に跋して云ふ、「樂毅論」二本あり、其一は、元豐の初め吳人石を太湖の水中に得たり、石の缺くる事過半にして、背面に皆刻あり、面十三、背亦た此の如し、後に永和四年十二月二十四日書賜官奴と題し、其上に昇僧權と書す、即ち梁朱昇徐僧權なり、其の一は、「周越隸苑」に載する所、高紳學士が、其石を秣陵の井中に得たる者是なり、凡そ二十九行、石一角を缺く、後の兩行只最下の一字あり、海字に至つて止む、紳の子安世吳に卒す、後其石を以て州民錢氏の家の質とし、熙寧中趙子立なる者之を得たりと。又云ふ、舊傳に、「樂毅論」は乃ち右軍親から石に書す、其後石は昭陵

に入りしを、温韜陵を發きて之を得たり、即ち高氏本なり、是れ褚遂良の記に云ふ、貞觀中樂毅論眞迹を内出し、弘文館馮承素をして摹寫せしめ、長孫無忌等に賜ふものなり。趙子立が得し所の高氏本の石は、女婿徐康直、字は手甫なるものに傳へたりと。

〔樂毅論〕を收めたる集帳中には、印刷の少し不充分なる點あるも、〔餘清齋帖〕に在るを宜しとす、其の帖の明の楊明時の跋に、「此本結字純古、剛に似て而して柔、形正うして而して逸、唐諱を闕畫せず、蓋し梁摹本ならん、趙子昂は云ふ、齋梁人の結字、古ならざるに非ず、但だ俊氣に乏しと、此れ右軍を摹するの書、既に古且つ俊、楷書中の至寶なり云々」。又清の王虛舟は云ふ、帖末に右

軍書付官奴の六字を署す、官奴とは王大令の小字なり、之に庭訓を示す、故に筆法端謹、右軍の楷書第一たり、貞觀十三年、馮承素等に勅して六本を勾摹し、長孫無忌等諸人に分ち賜ふ、明季の收藏家に、唐摹二本を藏する者あり、一は則ち涿鹿の馮伯衡の家に在り、端謹あまりあれども、頗る勝槩に乏しく、一は則ち新安の吳用卿の藏する所、即ち此本にて、筆勢精妙、柔に似て剛に、謹に似て逸なり。邢子愿が所謂、既に純且つ綿に、亦た温にして栗なりとは、信に評し得て當れりと謂ふべし、宋僧希白が、〔潭帖〕に刻する所と、吾が家の〔欝岡〕、吳氏の〔餘清〕との兩刻は、尤も妙と謂ふべし云々と。

我が正倉院寶庫に藏する所の、光明后御書樂毅論眞蹟は、

書勢の妙なること、各帖の「樂毅論」を以つて之に較ぶるに、遠く及ぶ能はざる所なるが、獨り此の餘清齋本のみは、寶庫の眞蹟と、神理の冥合を見るものあり、洵に貴ぶべし。

御物光明皇后
の樂毅論

東大寺獻物帳に載す所の、光明皇后書「樂毅論」一卷は、白麻紙、瑪瑙軸、紫紙縹、綺帶にして、今は帝室の御物となれるが、此卷末紙上に、「天平十六年十月三日藤三娘」と識され、又卷の題簽には、「樂毅論紫微中臺御書」と署せり。明の邢子愿は古人「樂毅論」を以て王右軍正書第一と爲すと曰ひ、唐の孫過庭は、樂毅を寫せば、情佛鬱多しと云ふ。然るに世に傳ふる所、佳本は甚だ少なく、過庭の所謂佛鬱たる者は、既に見る能はず、而して此の眞蹟四十餘行

は、神彩奕々として古厚峻拔、千歳の下に於て、晉蹟の遺韻を窺ふを得るは、眞に藤後の賜と云ふべし。

黃庭經

黃庭經(王羲之小楷)「河南書目」に云ふ六十行、永和十二年山陰道士に與ふと。傳へ云ふ、晋の王羲之、鶩を好む、山陰の曇釀村に一道士あり、鶩十餘羽を養ふ、羲之之を買はんとするも與へずして曰く、余性道教を好み、「老子」を寫さんと欲すること久しく、縑素は早く備へ居れるも、人の能く書するなし、府君若し能く自から屈して「道德經」各兩章を寫さば、鶩群を擧げて、之を奉ずべしと、羲之即ち往く事半日、寫し畢り、鶩を籠にして歸ると。唐の徐浩が「古蹟記」に云ふ、「玄宗開元五年十一月五日、大小二王の眞蹟を收綴して、一百五十八卷を得たり。大王

正書三卷、内「黃庭經」第一、「畫贊」第二、「告誓」第三、臣以爲らく、畫贊は是れ偽跡、眞に近からず。と「董道書跋」に云ふ、唐朝漢魏晋隋の書を得る、多き事七百卷に至る、而して黃庭を第一と爲すと、又云ふ「黃庭」は、王右軍の書に非ず、傳を以て之を考ふるに、嘗て「道德經」を書せるを知る、「黃庭」を寫すを言はずと、然れども他の諸説を考ふるに、「黃庭經」は、右軍の正書第一たりしも、眞迹已に亡び、其の石に刻せられたる者は、唐以後の人の摸搨に係り、宋時已に二三本ありしと云ふ、顧ふに義之は「道德經」を寫して、「黃庭」を寫さざりしか、「黃庭」を寫して、「道德經」を寫さざりしか、或は二つながら之を寫して、傳説は何時しか此の兩者を混同したるものなるか、

未だ俄に斷案を下すべからず。楊守敬曰く、餘清齋の刻する所は、是れ褚臨、詒晋齋刻本は、縱横跌蕩、生龍活虎の如し。

東京朔書讀
東方朔畫讚(王羲之正書)「河南書跋」に云ふ、三十行、「廣川書跋」の云ふ所に依れば、王濛の子脩、嘗て書を右軍に求む、右軍爲に「東方朔畫贊」を寫して之を與ふ、脩死するに及び、之を棺中に置きたりと云へば、此書早く已に傳はらず、今傳ふる所の者は、蓋し後人の假托に出づるものなるべし。

佛遺教經(王羲之小楷)「集古錄」に云ふ、之を羲之の書と傳ふるは偽なり、蓋し唐時寫經手の書する所ならん、唐時の佛書にして、今に存するもの、大抵此の如しと、黃山

谷云ふ、此書楷法中に在りて、少しく「樂毅論」に及ばずと雖も、疎肥をして密ならしめ、密瘦をして疎ならしめ、自から古人の意を得たり、其名輩の爲に推さるゝ誠に所以あり。

曹娥碑

曹娥碑(王羲之正書) 字體尤も小さく、方を易へて扁と爲す、吳荷屋が刻する所の「筠清館帖」には、帖眉に唐人の題字あり、是れ宋拓より出づ。

告誓文

告誓文(王羲之正書) 「河南書目」に云ふ、十四行。董道云ふ、「告誓文」は、今晋書傳中に入る、開元中此書を潤州瓦官寺講堂の鴟尾に得たり、其書一字數體たり、一體別に點畫を成す、一概に之を求むべからず、實に天下の奇作なり、今の碑字は刻畫嚴重に過ぐ、是れ唐の寫經手が搨

摹して、以て傳へたるものなるべし、或は云ふ、智永右軍の五紙を臨し、「告誓」第一たり、今見る所の者は、多く永師の書なりと。顧ふに此書、亦た傳摹相承、其眞贋を辨ずる事甚だ難かるべし。

蘭亭序

蘭亭序(王羲之行書) 右軍の書中にて、最も有名なる法書にして、晋の穆帝、永和九年三月三日、四十一人同じく山陰の蘭亭に遊び、羲之序を製し、酒酣に興樂して書す、之を書するに、鼠鬚筆蠶繭紙を用ふ、遁媚勁健、絶代更に無し、凡そ二十八行、三百二十四字あり、字に同じきものあれば、皆な別體を構ふ、就中「之」の字最も多く、二十餘個あり、變轉悉く異なる、其時神助あるに似たり、醒後更に數十百本を書するも、皆前日に及ばず、羲之ま

た自から之を惜みて家藏となし、傳へて七代の孫智永に至る、永は羲之の第五子、徽之の後なり、故に獨り家法を傳へ、隋唐間諸家の師とする所たり、其書を弟子辨才に附す、唐の太宗頗る羲之の書を愛す、之を聞き蕭翼をして計を以て取て内に入る、太宗崩ずる時、遺命して昭陵に入れしめ、眞跡遂に亡ぶも、太宗初めて眞跡を得るや、供奉搨書人趙模、韓道政、馮承素、諸葛貞等四人をして、各數本を搨せしめ、以て太子以下諸王近臣に賜ふ、爾來歲月匆匆、清初の頃に至ては、其搨本すら殆ど絶無にして、偶々之を得んと欲せば、數萬錢に價ひせりと云ふ。

宋の董道か、「廣川書跋」に云ふ、「蘭亭序」は、貞觀中舊と

二本あり、其一は昭陵に入り、其一は神龍中に當り、太平公主借りて搨摹し、遂に之を失ふ、其後溫韜御陵を發き、蘭亭再び此世に出づ、仁宗の時、關中、蘭亭の墨書を得たるも字畫王羲之の他の書に及ばず、其後秘閣此を用ひ、石に刻して法帖となす、今諸處蘭亭本十數種に至る、惟だ定州の舊石を勝れりと爲す、此書唐人の臨搨に係ると雖も、亦た自から佳處あり、又云ふ成都の蘭亭は、寶月刻し東坡賛す、蓋し子由之を中山の舊石に得たり、故に摹する所、獨り蜀に傳はり、中州人或は未だ知らざるなり、貞觀中湯普徹に詔して、蘭亭を搨して、梁公等八人に賜ひしが、普徹は別に竊かに搨して、外に出して、其書を傳へたり、普徹は能書にして、羲之の筆意を知る

が故に、摹搨と雖も、自から極處に到れるも、褚遂良歐陽詢の臨する所に及んでは、自から家法を出して、復た點畫に隨はず、蘭亭の眞本は、世に見るを得ず、普徹の典型として、猶ほ存するものにて、中山の舊石は、其になりと云へり、然れども、褚の佻逸は、或は之れ有らんが、歐陽詢は尙ほ羲之の面目を失はず、定武本は、疑らくは是れ歐陽詢の臨する所ならん。

歐陽修の「集古錄」に依れば、世に傳ふる所の蘭亭は、蓋し唐人數家の臨する所ならん、唐末の亂に、昭陵は溫韜の爲に發ばかれ、魏晉以來の諸賢の墨跡にして、爲に再び世に出でたるもの多く、蘭亭も亦た其中にあり、歐陽修藏する所も其一にて、流俗の傳ふる所、其所を記さ

ず、其二是殿中丞王廣淵の家に得、其三是故相王沂公の家に得、又別本あり、定州の民家に在り、各自石あり、其本を校するに、纖毫も異ならず、其四是蔡君謨の家に得、世に傳ふる所の本は、此れに出でずと。

『書法離鈎』に云ふ、世に定武本を第一と爲し、金陵清涼本を第二と爲す、定武本は薛珣別に石に刻して易へ去りしを、宣和年間に其家より禁中に入れしが、建炎南渡以來所在を知らず、清涼本は、洪武の初め、寺より宮に入り、其石天戒寺に留まりしを、僧の金西白盜み去り、後事顯はれ、僧は獄中に死し、石は遂に其所在を知らざるに至れり。

「藝苑扈言」に云ふ、定武本には肥ゆるあり、瘦するあり、

五字損本あり、五字不損本あり、當時諸供奉此帖を搨せしに、獨り歐陽詢の臨本眞に逼り、刻石之を禁中に留め、他本は外に在り、争うて相摹搨せしが歐本獨り出でず、耶律德光汴に入り、得て之を棄つ、李學究の家に流轉して、以て復た公庫に入る、謂はゆる未損本なり、定武薛紹彭之を他石に摹し潛かに古刻に易ふ、「於湍流左右」の五字、微かに一二筆を剗りて家に藏す、大觀中、皇帝之を知りて進御せしめ、之を宣和殿の壁に龕す、靖康の戦亂を經るも、此石獨り留りしを、宗汝霖得て光堯に進む、維揚に至つて、復た之を失ふ、謂はゆる損本なり、米元章云ふ、泗州の杜氏刻板蘭亭を收む、鋒勢筆活あり、余之を得、其木刻板を以て、定本及び世の妄刻本に比する

古博卷上
 其石獨り留りしを、宗汝霖得て光堯に進む、
 維揚に至つて、復た之を失ふ、謂はゆる損本なり、米元
 章云ふ、泗州の杜氏刻板蘭亭を收む、鋒勢筆活あり、余
 之を得、其木刻板を以て、定本及び世の妄刻本に比する

に、甚だ同じからず、此書の後世に亡びざるは、幸に此本の存するが爲めのみ、事を好む者に遇へば、一本を與ふ、再び得べからず、世に之を三米蘭亭と云ふ。

王鞏云ふ、余が家の印本は、是れ湯普徹の摹する所、王誦の家に贈りたる摹本と同一なり、錢塘の關景仁、唐の石本を收めて、定武よりも佳なれど、尙ほ吾家の板本に及ばず。簡緣云ふ、蘭亭は獨り眞跡の久しく亡はるゝのみならず、唐人の摹本も得べからず、惟に摹本のみならず定武の石搨も、亦た得べからず、蓋し石搨は宋より今（清初）に至るまで、己に勝て計ふべからず、惟だ定武學ぶべしと爲す、唐人の臨するものの中、佻險にして飛逸なるは、必ず褚河南、嚴整にして圓備なるものは、惟だ歐

陽蘭臺にて、定武の刻する所は、純ら是れ歐法なり、故に後學師とすべし、褚公は則ち老學に非ざれば窺ひ易からず、今石既に亡びたれば、定武より翻刻せしものも、亦重ざるに足れり、其餘の紛々たる翻本は、切に輕々しく信ずる勿れ云々。

楊守敬曰く、世に傳ふる蘭亭は、皆臨本にして、定武刻本を最と爲す、相傳ふ歐陽信本(詢)の臨する所なりと、今定武の原刻は、海内に數本のみならず、趙子固の落水本あり、乾隆の頃、内府に藏す、榮芑本あり、道光の間、吳荷屋に歸す、其の他は大抵宋の時の翻本にて、游氏の藏する所已に數百通に達す、今日墨色を以てこれを定むるに、孰れか宋拓にあらざらんも、遽に執つて眞の定武

と爲すは、一喙にも値ひせず、定武の翻刻にては、程孟陽を以て、最も佳なりとす、石は焦山に在り、王曉本これに次ぐ、吳荷屋が刻する所の晋府またこれに次ぐ、余が隣蘇園これを刻す、又所謂何氏本なるものあり、世に稱して定武の佳本と爲すも、其の實また後人の臨本にて、全く冲和の氣を失ふは、言ふ迄もなく、其の扁幅も亦た各本より、數分を短縮す、此れ果して原石より出づるか、又張全界奴本あり、相傳へて虞永興の臨となす、餘清齋これを刻し、秋碧堂またこれを刻す、皆な佳なり、又、帖の首尾に神龍の半印あるものあり、褚河南の臨本なりと傳ふ、明豊防これを刻す、詒晋齋の刻する所の他の一本も、亦た褚河南の臨と稱す、米の跋あり、又米氏の巾

箱本あり、是れ亦た褚臨と稱す、勃海の藏眞これを刻す、又馮承素本あり、内府これを刻す、これを蘭亭の八柱と謂ふ、

本書に收むる所の「蘭亭」は、穎上眞本を影寫したもので、明の嘉靖年間、穎上の井中に獲る所たり、「黃庭經」是亦本書に之を收む」と同一石に刻す、原と二十七字を缺く、識者定めて褚河南の書と爲す、世間流行本は、多く重摹に係り、毫も筆意なし、此本眞に原拓に係り、楊大飄、姜西溟、劉松年等が傳襲の跋あり、洵に希覯の佳帖たり。

聖教序(王羲之の行書)唐の太宗、聖教序を製し、高宗記を作り、僧の元辨多心經を譯し、弘福寺の沙門懷仁をして、

王右軍の行書にして、諸帖に散在せる文字を集め、其文を綴りて、石に勒せしめたるものにて、貞觀二十三年八月成り、咸亨三年十二月石に刻せり、宋代に至りて、翰林侍書の輩、多く此碑を學ぶ、學んで能はざれば、高韻なし、因て其書を號して院體と爲せり、然れども之を學んで至らざるもの、自から俗なるのみ、碑中の文字は、未だ嘗て俗ならず、書に深き者に非ざれば此を語るに足らず、楊守敬曰く、「懷仁集右軍聖教序」は、最も學者の宗とする所たり、夫れ右軍の書は、唐代に在つては、流傳すること、甚だ多しと雖も、能く集めて、一碑を爲すべきにあらず、大小また皆な宜しきに適するを見れば、必らず假借の多きを知るべし、惟だ懷仁等は、筆力既に

高く、書學も亦た遂し、遂に斯く一世を風靡したるものなるべし、然も院體の稱は、亦た識者の譏る所と爲る。

快雪時晴帖(王羲之行書) 此れ王右軍行書の眞跡中、最も有名の帖にて、「快雪堂帖」の始めに刻し、趙松雪の跋あり。「三希堂帖」にも、亦た始めにこれを載す。

十七帖(王羲之草書) 『法書要録』に云ふ、十七帖長さ一丈二尺、貞觀中の館本なり、凡そ百七行九百四十三字なり、羲之の草書中にて、烜赫著名の帖なり、文皇帝二王の書を購ふ、大王の書三千紙あり、率ね一丈二尺を以て一卷とし、其迹を取り、類を以て相從へ、綴て卷を成し、「貞觀」二字の印を以て之に捺す、褚遂良裝背を監し、率ね紫檀の軸首にして、白檀の身たり、紫羅縹織を帶と成す、

明皇開元五年、又「開元」二字の印を捺し、跋尾に當時大臣の名を列す、此帖「十七帖」と號するは、卷首に「十七」の字あるを以てなり、宋の黃廷堅が曰く、羲之の「十七帖」は、先唐所刻の石本にて、今世間に二種あり、其一は汴梁にて刻す、卷尾に大なる「勅」の字及び「褚遂良解無畏校」の字あり、是れ唐本にて最も佳なり、其一は「勅」の字なく、洛湯の李邕が家に藏する所の舊本なり、之と相類して、其餘世に傳ふる所の別本にて、賀知章の臨する所は、南唐の李後主煜之を得て石に勒し、澄心堂に置くものと爲す、本朝(宋朝)侍書王著、又別に石に刻す、勢ひ殊に疎拙にして瘦す、又一枝本あり、南唐刻に似たり、紋次顛舛、文は十七帖たり、而し誤り目して十八帖と爲す、字も亦た瘦

弱にして、眞を失ふ、獨り勅字本及び此本は、先唐の所刻にして、右軍の筆法具に存するも、頗る得難しと爲すと。然れども現に在る所の刻帖は勅字本も無勅本も共に概ね幾度かの轉摹を経たるものゝみにて、佳帖を得る事容易ならず。貫名菘翁嘗て佳本を藏し、後ち鳴鶴翁に歸するものあり、近來多く舶載せる古刻に比して、自ら異彩あり、晚翠軒にてコロタイプに附す。

尙ほ王右軍の諸帖にして、墨跡の流傳、緒ありとするものは左の如し、下に掲ぐるは、これを收むる所の帖名也

右軍の諸帖

- 思想帖 (餘清齋)
- 袁生帖 (爵岡齋)

王獻之

- 胡母帖 (餘清齋)
- 行穰帖 (同上)
- 官奴帖 (同上)
- 裏鮓帖 (鄰蘇園)
- 遠官帖 (同上)
- 破羌帖 (寶晉齋)
- 頭眩方帖 (筠清館)
- 蘭草帖 (餘清齋)

王獻之(晋人)

名は獻之、字は子敬、羲之の第七子、安僖后の父である、書を好くして父と並べ稱せられ、官中書令に至り、卒して族弟珉、字は季琰これに代り、又書を能くす、故に時

人、獻之を大令と稱し、珉を小令と稱す。

洛神賦(王獻之小楷) 昔人謂ふ、此帖、趙松雪が陳集賢に得る所の者十三行、僅に二百五十字あり、字畫神逸、墨彩飛動、天下法書の冠となすと、又「宣和書譜」に載する所の、末に柳公權の跋語ある者あり、然るに小楷全本の世に行はるゝは、未だ何れより來るを知らず。其の玉石本と稱するは、原と綠玉本たりしを、人あり白玉を以てこれを翻し、遂に綠玉白玉の分ちあり、其の後翻本日に出で、無慮數十通に達す。楊守敬曰く、唐荆川の藏本にて、柳誠懸の跋あるものを、世に眞迹となせるも、余以爲らく晋人の筆に似ず、必らず大令の眞迹にあらざるなり。

鴨頭丸帖 (淳化閣帖)

中秋帖 (清餘齋)

送梨帖 (鄰蘇園)

地黄湯帖 (筠青館)

萬崴通天帖(賞眞齋、三希堂)

異趣帖 (戲鴻堂、三希堂)

索靖(晋人)

名は靖、字は幼安、燉煌の人、章草を善くす、

月儀帖(索靖書) 書體は章草也、晋人は索靖を以て王羲之に比す、唐の李嗣眞云ふ、靖に月儀三章あり、其趣尙を見るに、大に遒竦となすと、「竹雲題跋」に曰く、其書晋人淡古の風韻に乏しと雖も、また唐人方幅の氣習なし、

應に齋梁間の人の手に出しものなるべしと、今續法帖中に刻するもの十二章あり、李嗣眞の見る所と同じからざるべし、鬱岡齋これを刻す。

六朝の楷法

秦篆、漢隸、次で来るものは、六朝の楷書である、南に在つては、阮雲臺が、雲南第一の古石と稱した「爨龍顔碑」と「瘞鶴銘」とを推し、殊に「瘞鶴銘」は、其の筆者に就て、王羲之と云ひ、陶宏景と云ひ、諸説紛々としては居るが、其の書の妙に至つては、更に何人も異論なく、北に在つては、何と謂つても鄭道昭の筆になるもので、「雲峰山」「天柱山」を始め、其の他の四十餘種あり、之に加ふるに「龍門の造像」幾百種を以てし、眞に碑界の大觀と云ふべく、

瘞鶴銘の墨妙

篆勢、分韻、草情畢く具はる、龍門の斬釘折刀

石經峪の筆致

鄭道昭は、包世臣の所謂篆勢、分韻、草情の畢く具はるもの、龍門は用筆の斬釘折刀なるを以て、共に其の特色を發揮し、「張猛龍碑」の健勁雅鍊なる、「根法師」の側鋒勢を取る、更に泰山「經石峪」の徑二尺の大字を書し、翻々として筆致ある、皆以て、六朝書道の偉觀を後世に誇耀すべきものであらう。

鳴鶴翁の六朝碑に對する意見、及びそれに就ての研究の態度等は、「學書經歷談」にも、其の大要が出て居るから、此に揚げて置きたいと思ふ。

「唐以前、六朝時代の碑には、唐碑に勝るものが澤山ありますが、從來我邦には、更に分らずに居りました。然るに楊守敬渡來後、始めて此事が明らかになりました、故

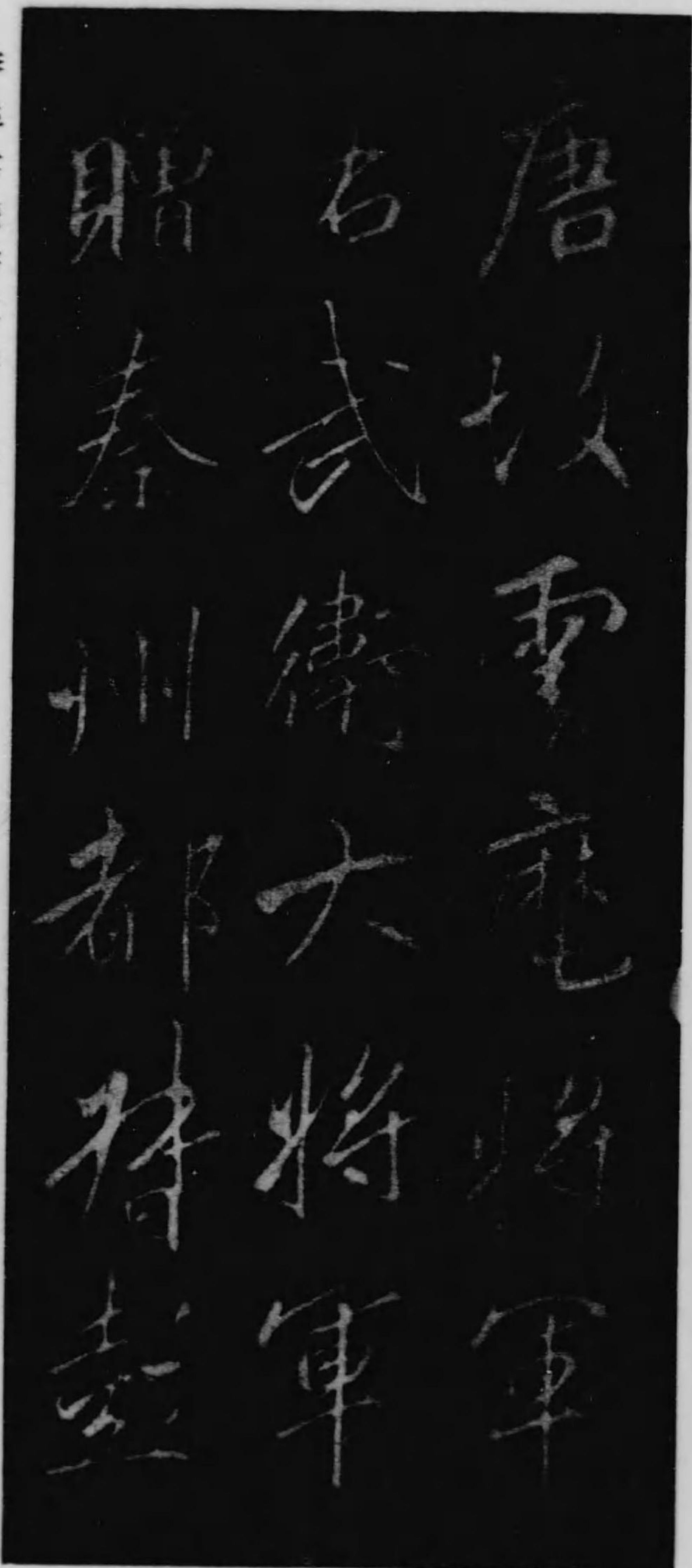
に秦漢の篆隸、及び六朝楷書の法などを研究して、世間に傳播する事を勉めました。其頃世間では、日下部は怪しい字を書き出した、魔道に陥つたなどの誹りを招き、或る二三の友人より、忠告を受けた事もありました。私は彼等が知る所に非らずと、無頓着に黙してやり通しました。漸く近年に至り、世人も漢隸とか、六朝とか云ひ出して來ましたが、尙ほ今日でも、世上に學者とか、書家とか稱せらるゝ人にして、唐に偏重するの舊習を脱せず、六朝の書は、妖怪の如く思ふ輩も多くあります。此輩は先入主となり、心が一方に偏するより、公平なる見識を持つことの出來ないのは、全く見聞の狭きに座せらるゝ爲めであります云々。

南北朝の宋に至ては、「寧州刺史功都縣侯爨龍顏碑」と云ふものがある。此の碑は大明二年の建設に係り、清の道光丁亥夏日、時の雲貴總督で、南帖北碑論の主唱者たる阮元(雲臺)が、始めて訪得したもので、楷書の石碑中、最も古いものと稱せられ、漢晉の正傳として、書體變遷の有様を見るには、貴重な石碑である。碑の高さ九尺、廣さ四尺五寸、厚さ八寸、二十四行、四十五字、額六行、行毎に四字、爨道慶の文にて、雲南省曲靖府陸涼州の東南二十里貞元堡に在る。

康有爲曰く、「爨龍顏」は、「靈廟碑陰」と同體にして、渾金璞玉、皆な元常を師とし、實に中郎の正統たり。又曰く、「爨龍顏」は、雄強茂美の宗たり、「靈廟碑陰」これを

補ふと、而して其碑品に於ては、神品三碑に過ぎずとなし、第一を「爨龍顏碑」、次を「靈廟碑陰」、次を「石門銘」となし、鄭道昭四十二種の如きは、妙品上として、更に其れに加へらる。

梁に於ては、墨妙莫二とも云ふべき、一個の筆蹟を遺した、それは云ふ迄もなく、「瘞鶴銘」である、其の選文者たる華陽眞逸も、書者の上皇山樵も、本名は誰であるか分らない、黄山谷は、王羲之の書だと云ひ、黄長睿は、陶宏景だと云ふ、羲之ならば、無論晉代であるが、書體の上から考へると、陶宏景の方が可いやうに思はれると、鳴鶴翁も謂つて居られる、さうすると梁になるのであるが、或は又願況といふ説もある、兎に角立派な筆蹟であ



李邕雲麾將軍碑 (唐)

ることには、誰しも異論はない、此の碑は江蘇省丹徒焦山に在り、久しく大江の中にあつて、満潮の時は、全部水中に隠れ、干潮の際には、漸く水を離れる有様で、所謂水拓本は、水の中に入つて摺つたものである。由來南方には、石碑が少ないので、金石の方面から謂へば、誠に索寞を感ずるのであるが、僅かに此の江南の第一碑を得て、北碑に對することを得、大字楷法の極則とも稱すべきものであらう。

これと同時に、南朝の小楷で、同じく陶宏景の筆になつた「舊館壇碑」と云ふものがある、或人はこれを以て、王羲之の的派であるとまでに推奨して居る、楊守敬も亦た其の傑作たることを認めて居るが、唯だ首の一行のみ

を、陶の親筆となし、「通體また自ら高古絶倫、顧ふに原石久しく佚し、金陵の蔡世松が墨緣堂にこれを刻し、余も亦た雙鈎、刻して望堂金石に入る」と謂つて居る。

北魏の盛観

書を談ずるもの、古は晉唐と云ひ、今は漢魏と云ふ。漢隸に次で、斯界に覇を争ふ者は、何と謂つても北魏である。同じ南北朝の時代でも、南方は立碑の禁制が嚴重なるに反し、北方は毫も是等の干涉なきのみならず、此の地には、道教佛教等が盛んに行はれた爲め、造像、刻經、浮圖幢柱の類が、到る處に建造せられ、碑碣の富み、宇内に冠たるのみならず、北方剛健の氣が、自ら筆墨の間に顯はれ、方勁截鐵、一種犯すべからざる風手を具へし

文字が現はれた。但し惜しいかな筆者の名は、其の二三を除くの外、多く明かでない、併しながら、魏碑中特に傑出したる、雲峰山、天柱山、其の他四十二種刻石の筆者たる鄭道昭に就ては、史實の徵すべきものもあつて、聊か之を傳へることが出来る。

鄭道昭(北魏人)

魏史に鄭羲なるものあり、道昭は其の季子である、羲は賄賂を取つたとか、何とか云ふので、餘り評判の好くない人のやうに傳へられて居るが、何をしたのか、能く分らない、兎に角、中書令秘書監使持節督兗州諸軍事安東將軍兗州刺史と云ふ長い役名もあり、文公と謚名された程の人である、謂はゞ其地方に於ける立派な大名であつ

天柱山

て、道昭も亦た平東將軍光州刺史となり、自ら稱して中岳先生と曰ひ、學問もあり、才氣も優れ、殊に書に於ては絶特の妙技を有して居たものと見え、其の領地四五里四方の内は、山となく谷となく、其の手に成る所の大小の刻石が、四十餘種に達し、就中有名なるは「雲峰山」、

「天柱山」、「大基山」等の摩崖の碑である。

「天柱山」は、名の如く天に冲する絶壁の巖腹に、何うして彫つたらうかと思ふ様な所に彫り付けてある、併し是は思ふ様になかつたものと見えて、更に下碑と云ふものを建てた。共に「鄭文公碑」即ち其の父羲の行狀を記したものであるが、其の終りに「以石好故於此刊之」とあるのを見れば、石を選ぶに就て、餘程苦心して居たことも見

鄭文公下碑

鄭文公碑は千餘言の大文章

方筆圓筆兼れ用ふ

える。鄭道昭は、實に書法に卓絶し、是等の諸碑は、楷法の極則と爲すべきものである。包世臣は、其書を評して、篆勢分韻草情畢く具はり、南朝の遺蹟にては、唯だ一の「瘞鶴銘」のみ其美を比ぶ可しと謂つて居るのであるが、「瘞鶴銘」は、別項に記した如く、磨泐既に甚しく、僅かに數十字を有するに過ぎないのに、道昭の筆に成るものは、「鄭文公碑」ばかりでも、千餘字ある、若しも總てを合する時は、大小數千字の多きに達し、何れも割合に剝蝕が少ない、眞に宇内の大觀と謂ふ可きである。然るに康有爲は、魏の「石門銘」を以て、眞書圓筆の大宗と爲し、「鶴銘」と「鄭碑」とを以て、之が補と爲すとするに至つては冠履倒置と謂はなければならぬ、殊に鄭道昭の字は、圓筆

ばかりではない、方筆も亦た巧に之を使用して居る。

二七八

(考)

楊守敬曰く、雲峰の鄭道昭の諸碑は、遼勁奇偉、南朝の「瘞鶴銘」と、異曲同工で、擘窠の大書は、此れを極則とする。

又曰く、鄭道昭は、舒展自如たり。

包世臣曰く、北碑體多く旁かたみく出づ、鄭文公の碑字獨り眞正なり、篆勢分韻章情畢く具はる、其中布白は、「乙瑛」に本づき、措畫は「石鼓」に本づき、草と源を同うす、故に自署して、草篆と曰ふ、分ぶんと言はざるは、體近く見易すければなり、「中明壇題名」、「雲峰山五言」を以て之を驗するに、中岳先生の書たる疑ひなし、碑に稱す、其才

は祕穎に冠たり、研圖注篆、虚しからざるのみと、南朝の遺迹にては、唯だ「鶴銘」、「石闕」の二種、蕭散駿逸、途を殊にし、歸を同うす、而して「鶴銘」は剋勅已に甚しく、「石闕」は十餘字に過ぎず、また反刻に係る、此碑の字、千言に逾ゆ、其空白の處は、乃ち摩崖の石拗よこみたれば、字を譲りて均しく行く、並に剝損にあらず、眞に文苑の奇珠なり。(藝舟雙楫)

康有爲曰く、「石門銘」は、飛逸渾穆の宗たり、「鄭文公」、「瘞鶴銘」これこれを補ふ。又曰く、「白駒谷」の體は、轉折點畫皆な數筆を以て一筆と爲す、學者善く學ばざれば、尤も板滯たるを患ひ、更に氣無きを患ふ、此れ是れ方筆を用ふるものなればなり、方筆は、榜書を寫すこと最も難し、

然れども能く寫さば、莊雅嚴重、觀望に美なり、北碑に
深きものに非ざれば、能く之を爲して弊なきは寡なし。
又曰く、數十の大字、鄭道昭「太基」「仙壇」及び「觀海
島詩」に如くはなし、高氣秀韻、馨芬目に溢る。又曰く、
「雲峰山」の石刻は、體高く氣逸し、密緻にして通理、仙人
の樹に嘯き、海客の槎を泛ぶる如く、人をして想像盡く
ること無からしむ。

然るに鄭道昭の書蹟は、これに止まらず、北齊泰山に、
「經石峪」と稱する一區劃があつて、山を越え谷に亙り、
適當なる岩を見附けては、それに金剛經を彫つたもので、
文字の直徑二尺もあり、書體は楷書の如く隸書の如く、

翻々として頗る筆致に富んで居るが、是亦た鄭道昭の筆
であらうと云ふことになつて居る。近來此の經石峪の大
字を、一字づゝ黒摺、或は朱摺にして、それを二字又は
三四字の語に綴つて賣つて居るものがある、額又は幅と
して、趣きのあるものであるが、古人が大字如小字と謂
つたのは、唯だ此の碑のみこれに當ることが出来る、阮
元から包世臣のころまでは、まだ二百字位しか發見され
て居なかつたが、今では八百字にも上つて居る。惜しい
とには、雨の降るたびに、水が砂を流して、碑面の磨泐
を促がし、又は無制限に、亂暴な摺り方をするので、此
の大字も段々淺くなつて、字が細くなる、何とか保存の
仕方はないものであらうか。

(考)

楊守敬曰く、北齊泰山の經石峪は、徑尺の大書であるが、小楷を作るが如く、紆徐容與、絶えて劒拔弩張の迹がない。

包世臣曰く、泰山經石峪の大字は、完好なるもの二百を下らず、焦山の「鶴銘」と近し、而して淵穆時に或はこれに過ぐ。

又曰く鄭文公の季子道昭、自から中岳先生と稱し、雲峰山五言及び題名十餘處あり、字勢巧妙俊麗、近ごろ南朝の郗超、謝萬、常に疑ふ其の父「墓下碑」、「經石峪」大字、「刁惠公誌」は、その手に出づるものならんを。

康有爲曰く、「經石峪」は、榜書の宗たり、「白駒谷」これを

輔く。

又曰く、榜書も亦た方筆圓筆に分ち、亦た鍾衛に導源す、「經石峪」は圓筆なり、「白駒谷」は方筆なり、然れども自ら「經石峪」を以て第一と爲す、其の筆意略ぼ鄭文公に同じく、草情篆韻、備はらざるなく、雄渾古穆、これを榜書に得たり。又曰く、東坡曰く大字は當に結密にして間無からしむべしと、此れ榜書の能品にあらず、試みに「經石峪」を観るに、正に是れ寬綽餘りあるのみ。

同じ魏碑中でも、別に一種の風格を具へて居るのは、河南省洛陽龍門に在る所の「龍門造像記」で、大小實に數千の多きに達し、刻石文字界の一大異彩と稱すべく、仔

龍門四品

細にこれを吟味すれば、一碑々々、また多少の面目あることは勿論であるが、概してこれを云へば、其の特色は、用筆の斬釘、折刀なる所に在り、其の中の佳なるものは、「始平公」、「孫秋生」、「楊大眼」、「魏靈藏」であつて、これを龍門の四品と云ひ、後ちまた増して二十品に至り、北碑を學ぶものは、大抵皆なこれより入手する、但し筆者の名を署したのは、蕭顯慶、朱義章等の兩三名に過ぎない。

(考)

康有爲曰く、魏碑は、大種三あり、一に曰く龍門の造像、一に曰く雲峰の石刻、一に曰く岡山、尖山、鐵山の摩崖にして、皆な數十種同一の體なるもの、其の中にて、龍門は方筆の極軌たり、雲峰は圓筆の極軌たり、二種盟を

魏碑に三種あり

争ふ、極めて盛なりと謂ふべし。

張猛龍碑

魏碑で有名なものには、まだ「張猛龍碑」がある、碑面の文字は、「魏魯郡太守張府君清頌碑」の十二字に過ぎないが、方四寸に亙る大字で、其の楷法の健勁にして雅鍊なる、また碑陰の瀟洒にして古淡なる、高く唐人の上に出で居るのであるが、併し康有爲が、之を以て正體變態の宗だとして居るのは、恐らく阿好の誹りを免れないであらう。此の碑は、正光三年の建設に係り、山東省曲阜の孔子廟に在り、「冬溫夏清」の四字の未だ磨滅して居ない本は、先づ舊拓と云ふことになつて居る。

又側法用筆の變化を見るに、最も好いものは、「馬鳴寺根

根法師碑

法師碑」で、別に拓本では無く、肉筆で我國に傳つて居るものに、陶件虎の眞蹟に係れる「菩薩處胎經」と云ふものがある。凡そ古人の筆意を窺ふに、肉筆ほど便利なものゝ無いことは、今更ら云ふ迄もないことで、我國には、幸に古寫經の存するものが、少なくないのであるが、殊にこれは、西魏大統十六年の筆になり、六朝人眞蹟の雄なるものとして、字内第一と稱すべく、支那にも無論此の類のものはない、實に貴重な品と謂はねばならぬ。「菩薩處胎經」は、我が國寶の一で、現に京都知恩院の所藏となつて居る、書寫の年月たる西魏の大統十六年は、我が欽明天皇の十一年庚午に當り、今を去ること、約一千三百五十年の昔である、故に甚だしく本書を尊崇する

ものは、「日本書紀」に載する所の、欽明十三年に、百濟の聖明王が進獻したものとさへ稱して居る、其當否は暫らく措き、是れ東洋翰墨の精華たるのみならず、世界に於ける一大奇蹟たるは、何人も異論なき處であらう、本書は、古來大和國金峰山寺の所藏であつたのを、文久元年知恩院主佛眼徹定上人の識る所となり、遂に同院に歸したものである。舊は卷子であつたのが、今は帖仕立となり、凡そ五帖、第一は天宮、遊歩、聖諦、佛樹の四品、第二は、識住處品で、此中の二張は、後人の補寫に係り、第三は、隨喜、尋識、差別、不定、衆生、法輪の六品とも、悉く陶件虎の筆に成り、第五の、五樂品は、第十三行以下、唐代人の補寫したものであるが、また觀るに足

る、陶作虎の何人たるやは、未だ詳かでないが、この書は、字畫が端正で、楷書にして隸意を帯び、結體運腕、共に王右軍の「内景經」に彷彿たるものあり、その淵源は、孰れも皆鍾繇から來たもので、六朝の肉蹟滋味、津々として盡きざるものがある、若し夫れ別體文字の奇なるに至りては、一々枚擧するに遑がない程で、それに就ては、同治十年、清人金嘉穗の跋文があつて、之を一覽すれば、其の大概を知ることが出来る。

〔考〕

楊守敬曰く、「張奢」「賈思伯」の如きに至ては、淳古遒厚で、剝蝕過甚なりと雖も、而も存する所の完字は、皆至寶である、「太公廟碑」「張猛龍碑」は、整鍊方折、碑陰は



顏真卿宋璟碑 (唐)

則ち流宕奇特である。「李仲璇」は、間々篆體を雜へ、而も精勁絶倫で、「敬使君碑」は、方を化して圓と爲し、暗に篆筆を用ひ、而も流美なること對するものはない、「孝文弔比于墓」は、瘦削獨出で、近づくことは出来ない、皆な北魏の傑作である。

毛鳳枝曰く、北齊「定國寺碑」、俗に小齊碑と呼ぶもの、上は「舊館壇碑」を承け、下は「盩禪師記」を開き、北碑無上の妙品たり、臨池家の當に熟翫すべき所である。

南北朝も、既に終りに近づいて、書體も稍や唐風を帶ぶるに至り、茲に順序として智永禪師のことを述べなければならぬ。

○ 退筆成山鐵限穿 一樓靜坐卅餘年

晉賢爲祖唐爲子 正法眼傳文字禪

智永

智永 (陳人)

智永、字は法極、王羲之七世の孫で、第五子徽之の後である。兄の考賓と共に、家を捨て、道に入り、遠く祖風を繼いで書學に没頭した人で、晉を祖となし、唐を子とした文字禪であるが、憾むらくは、其の眞訣が今日に傳はつて居ない。智永の書としては、僅かに「眞草千字文」があるのみである。本書に收むる所の拓本は明の寧王府の舊藏に係るもので、宸濠の變に當り、王陽明が、亂を定め、宮中に入りて持ち歸り、甚だ珍重を加へ、知心の

智永禪師

友に非ざれば肯て一見を許さず、陽和の文恭公毎に陽明に従て學を講じ、時に借覽することを得、驚いて稀世の寶墨と爲す、後ち陽明が館を捐るに及んで、厚價を以て之を購ひ、一軒を築て寶墨と顔し、什襲珍藏、四世に至る、事は載せて郡志に詳かである、徐渭、朱之蕃、孫承澤等諸家の跋もあつたが、今は缺けて、惜むべきことである。鳴鶴翁嘗て楊守敬より此帖を獲るや、守敬曰く、此の帖國初に於て眞蹟より摹刻し、精巧を極めし者にて、大觀薛氏本の、數次翻刻を経たる、無氣力無精神の者に較べ、日を同うして語るべからず、學者此書を翫味して、永師が大海の穩波、夷途の良轡の妙諦を解せば、自ら虞書用筆の由來する所を知らん、又帖中處々字の右傍に朱

二九二
 點あるは、楊氏が楷法溯源を著はす時、其の師潘孺初が、佳字を選んで朱點を施した者で、溯源書中に、皆採録した文字であると云つて居たさうな。

(考)

眞草千字文(智永書) 梁の武帝、王羲之の遺書を得、殷鐵石をして一千字を搨せしむ、每字一紙、雜碎にして次序なかりしを、散騎侍郎周興嗣に命じ、次して韻語となさしむ、一夕にして之を成し、鬚鬢悉く白し、謂ふ心力此に極れりと、當時甚だ之を重んず、詔して蕭子雲をして進寫せしむ、後世書を以て名ある者は、率ね千字を作ることゝなれり、智永は羲之七世の孫にして、家法を傳へ、隋唐書を學ぶものゝ宗匠たり、吳興の永欣寺に住す、

樓に登て下らざる事四十餘年、積年臨書の千字文、八百本を得て、江東の諸寺に各一本を施し、退くる所の筆頭は一石餘も入るべき大竹籠に入れ、其竹籠五個に滿つ、取て之を瘞め、退筆塚と號す、書を求むる者市の如く、居る所の戸限之が爲に穴を穿つに至る、乃ち鐵葉を以て之を裹みて、鐵門限と謂ふ、長安崔氏が藏する所の千文、眞迹最も佳なり、大觀己丑、樂安の薛嗣昌、工に命じ石に刊して之を漕司南廳に置けり、一は眞行にして、一は行草の二種あり、海嶽名言に云ふ、智永臨集千文は、秀潤圓勁、八面俱に備はる、眞迹あり顛沛の字より起る、唐林夫の處に在り、他人收むる所之に及ばずと。

楷法の整齊

晉の懷帝以來、約そ三百年の間、互に割據して覇を争うて居た南北朝も、隋に至つてこれを統一すると同時に、六代の菁華を萃めて、三唐の風氣を開き、其の書法も亦た、整齊の氣象あり、隋碑の上乗に位するものは、「啓法寺」、「龍藏寺」の二碑であるが、「龍藏寺」は、「賀君誼」と共に、虞世南、褚遂良の先聲たり、「啓法寺」は、「趙芬殘碑」、「丁道護」と共に、顏真卿、柳公權等の爲めに、門徑を開いたとも云ふべきであらう。

啓法寺碑
龍藏寺碑
賀君誼
趙芬殘碑
丁道護碑

六 唐—篆、隸、楷、行、草

唐に於ける文物制度の完整は、其の影響自ら書風の上に及び、科擧の制を定め、試験に依つて、人を取ることになつて以來、對策の文字は、謹嚴方正なる書體を以て、これを書するにあらざれば、假令策文は立流でも、及第することが出来ない、即ち書體の如何が、直ちに一身の榮枯盛衰に多大の關係を有する事になつたので、字畫の方整を、非常に八釜しく云ふやうになり、「千祿字書」などの如き書物も出來て、字を習ふ重なる目的が、試験を受ける準備の爲めとなり、從來の書體を一變して、字畫は謹嚴方正となり、外見の甚だ好くなつたと同時に、次第に雅致を失ふに至つたのである。併し初唐の頃に於ける、虞世南、褚遂良、歐

唐代文明の影

謹嚴方正の文字

玄宗肥字を好む

陽詢などの楷書は、尙ほ六朝の風氣を帶び、隨て雅致にも富んで居り、次で起つた所の顏眞卿は、彼の通りの人物であるから、書も隨て立派なもので、柳公權の頃までは、別に顏風を認めないが、玄宗皇帝が、肥俗な書を好むやうになつて以來、中唐以後に於ける文字は、全く俗格に落ちて、見るに足らざるものとなつた、此の時代に於ける、「景龍觀鐘銘」の如きは、純然たる大師流とも云ふべきものであらう。唐朝の書風は、斯く顏俗に傾いたとは云へ、六朝には行草の學ぶべきものが無いから、行草を學ばんとするには、是非とも唐に由らなければならぬ、即ち楷行としては李邕の「雲麾將軍」、「麓山寺」、行草としては顏眞卿の「爭座位」、「祭姪」、「祭伯父」の如き、又草書としては、懷素の「千字文」、孫過

唐朝の行書

唐朝の篆書

庭の「書譜」の如き、缺くべからざるものである。而して此に特に記さねばならぬのは、李陽氷の篆書で、六朝をも、漢をも派つて、直に秦の李斯に接すと云ふべきであらう。

唐朝の楷法

有唐三百年、文物典章、燦然として一大異彩を放ち、隨て豐碑大碣の見るべきもの頗る夥しく、選文、書者、悉く一時の選を極め、概ね皆な謹嚴方整であつて、衣冠東帶の文字としては、最も適當なる書體であるが、これが爲めに、また大に顏俗の氣風を醸成したをも免れない。唐初の四家と謂へば、歐陽詢、虞世南、褚遂良、薛稷を指すのである、併し薛の碑で、今残つて居るものは甚だ

唐初の四大家

少ない、唯だ「昇仙太子碑陰」の題名と、集帖中に「香冥君碑」があるばかりである、是等の人々は謂ふに及ばず、顔真卿、柳公権の頃までは、六朝爽健の氣を承けて、書風も大に見るべきあり、唐代特有の象徴を誇るに足るものもあつたのであるが、玄宗皇帝が肥俗の文字を好み、蘇靈芝の一派が起るに及んで、次第に俗格に落ち、遂に見るに足らざるものとなつた、此の時代の書に、「景龍觀鐘銘」と云ふものがある、これは睿宗皇帝の選書に係り、其の書體は、純然たる大師流、「之」の字の波磔の跳ね方の、ぶる／＼と震へたやうになつて居る處など、少しも違はない、大師流も大師の發明ではなくて、既に此の書風は、唐に在つたことが明白である、弘法でも傳教でも、あれ

程の人物であるから、幸に書風も俗惡を免かれては居るものゝ、其の以前なる貞觀の頃にでも渡唐したならば、一層立派な文字を傳へるとが出来たであらうに惜いとであつた、我國のお家流は、確かに此の時に胚胎して居る。

(考)

楊守敬曰く、「龍藏寺」、「霽巖碑」、「啓法寺」、「元公姬氏」、「尉富娘」等の墓志の如きは、已に有唐の先聲を開き、虞世南の廟堂歐(歐陽詢)の醴泉褚(遂良)の聖教の如きに至つては、遂に楷法の極則たり、顔柳而後は、また別に體裁を出さず。

歐陽詢(唐人)

○

鳴鐘

一掃北朝寒險風 端莊清俊筆鋒雄

陶鄭而還無勁敵 楷模百代仰歐公

名は詢、字は信本、長沙汨羅の人で、官は銀青光祿大夫、率更令に至つた、故に此人の事を單に率更とも稱することもある、八體皆な能くし、最も飛白に精しと傳へられて居るが、其の今日に傳つて、主として敬仰されて居るのは、楷書である、而して其の楷書は、北魏「張猛龍」から來て居るとの説を爲すものがある、或はさうかも知れぬ。

九成宮醴泉銘

九成宮醴泉銘(歐陽詢楷書) 唐代の碑碣が、概ね磨滅せる間に在つて、此碑のみ比較的久しく搨出に堪へた、故に他に比して舊本多きも、今は此碑も亦た已に壞破せり。

此の書を以て、楷法の極則と爲すことに就ては、何人も異論の無い所である。

化度寺碑

化度寺碑(同上) 九成宮醴泉銘と並稱さるべく、歐書中に在つて最も法を取るべきものたり。楊守敬曰く、歐書の極めて醇古なるものは、之を以て最も烜赫となす。

虞恭公碑

虞恭公碑(同上) 平正婉和、歐書中最も晩年の作なりと稱せらるゝも、惜むべし缺落半ばに過ぐるを、其の結體は、「醴泉」の開張にも似ず、又「皇甫」の峻拔にも似て居らぬ。

皇甫君碑

皇甫君碑(同上) 歐書中の最も險勁なるもの、此碑壞破已に久しく、字多く缺損して、存する者數十字のみ、今傳ふる所の石本、概ね重摸に係る。

史事帖

史事帖(同上) 快雪堂刻する所の二通、絶佳なり、宋の徽宗の跋あり、これを觀れば、率更が獨り千古の人たるを知るに足る。

夢奠帖

夢奠帖、由余帖(同上) 格律は足ると雖も神理は稍や遜る。

草書千字文

草書千字文(同上) 此の石北京に出づ、前の數翻を缺き、成親王これを補ふ、亦た超妙なり。

行草千文

行草千文(同上) 完整にして、缺くるなし、題して「穿柳堂帖」と云ふ、此の石また北京に出づ。

虞世南

虞世南(唐人)

鳴鶴

空聞腕有羲之鬼 眞訣從來恨不傳
孔子廟碑亡久矣 魂飛神往一千年

夫子廟堂碑

名は世南、字は伯施、會稽餘姚の人で、官は銀青光祿大夫に至り、永興公に封ぜらる、故に世に虞永興とも云ふ、卒する年八十九。古來其の書は王獻之の規矩を得たりと稱せられて居るのであるが、鳴鶴翁は、是れまた隋碑啓法寺、「龍藏寺」等の先聲に由つたものだと謂つて居られ、或は「敬史君」から出たとも稱せられて居る。虞世南は、誠に立派な字であるが、惜しいことには、其の筆に成る所の石碑は甚だ多くない。

夫子廟堂碑(虞世南楷書)

歐陽修「集古錄」に云ふ、余兒童たりし時、嘗て此碑を學ぶに刻畫完好なりしが、二十年の後復た一本を得たるに、殘破甚だしかりしと、思ふに斯碑北宋の時、已に損壞せるものならん。楊守敬曰く、虞

汝南公主墓誌

永興の「廟堂碑」は、風神凝遠であるが、惟だ原拓が久しく已に失はれ、五代の「陝刻本」は、これを鈍拙に失し、元代の「城武本」は、これを輕弱に失し、惟だ臨川李氏の得る所の、元と康里氏の藏本で、翁覃溪の監刻を経たものが、矩度を失はない。

汝南公主墓誌

汝南公主墓誌(同上) 是また有名な帖であつて、清初乾隆嘉慶の頃には、まだ原碑を存して居たが、今は亡くなつた、畢氏の「經訓堂帖」に刻してあるのが、頗る佳である、但し其眞跡をコロタイプに附した稿本がある。

興積時帖

興積時帖(同上) 筆を下すこと、天馬の空を行くが如しと稱せらる、「餘清齋」の刻本が、最も佳い。

褚遂良(唐人)

十一月 日金紫光祿大夫檢
校刑部尚書右丞相國魯郡
公顏真卿真卿漢書

顏真卿爭坐位帖(唐)

褚遂良は虞世
南に學ぶ

○

鳴鶴

廷争還笏見精神 筆挾風霜力萬鈞

羅綺春林如美女 咲他皮相目伊人

名は遂良、字は登善、河南陽翟の人、或は抗州錢塘の人とも傳へられ、官は尙書左僕射に至つて居る、少にして書を虞世南に學び、後ち史稜より用筆の法を得、長じて王右軍を祖述したと傳へられて居る。太宗皇帝が深く右軍の書を愛し、汎く之を天下に求めた時、遂良に命じて其眞僞を識別せしめたと云ふことである。褚遂良は、また實に一代の宗師であつて、有唐の楷法は、其の範圍を出づる能はず、顯慶より開元に至るまでの碑誌は、褚書に習ふもの、十中八九に居ると云はれて居る位である。

聖教序(褚遂良楷書) 褚遂良、初め王羲之を學び、既にして虞世南を學び、後ち史稜より用筆の法を得たり、臨聖教序の石刻二有り、一は龍朔三年陝西西安府同州府廳に刻するもので、之れを「同州聖教」と云ひ、筆畫稍や粗硬に失し、一は永徽四年河南歸德府州中に刻す、之れを「雁塔聖教」と稱し、褚遂良の代表作にして、唐代の書法を示したる殆んど唯一のものとなし、其の刻石の質が、非常に硬い爲め、他の碑は、大抵磨泐するか、或は覆刻されたにも拘はらず「雁塔聖教」のみは、清瑩玉の如く、宋拓も、明拓も、最近の拓本も、殆んど差が無い程である。楊守敬曰く、褚河南の「雁塔聖教序」は、昔人が其れを稱して煙裊晴空と云つたのは、最も善く形狀したもので

ある、而るに述書に、美人嬋娟、羅衣に勝へざる如しと云ひ、嗤つて澆漓と爲して居るのは、後學輕佻者の爲めに、一鍼を痛下した譯であるが、然し是れは承學者の誤りで、原書は紙を離るゝ一等と雖も、實に筆を下すこと千斤で、宋の徽宗の瘦金書は、乃ち此れより脱胎したのである。

孟法師碑銘(同上) 褚碑中有名なものたるに拘はらず、原碑は久しい以前に亡くなつたのみならず、其の拓本すら絶無僅有と云ふ有様で、楊守敬の如き、金石の大家でありながら、漸く覆刻本を得て、それすら大に珍重し、先年我國に駐在中、鳴鶴翁に勧め、其の覆本に由つて、更に之を雙鉤覆刻せしめ、其の終りに長文の跋を認めた

程のものであつたが、不思議なことには、近頃其の原拓が世に出て、然も日本人の手に歸したので、談書會から、コロタイプに附して發行した、本書も亦た其の一部分を挿入することゝした。

枯樹賦(同上) 古集帖には、これを收むるものが多い、

今は周於禮の聽雨樓を以て最も佳なりとし、楊守敬の「鄰蘇園帖」にも、これを刻してある。

倪寬贊(同上) 「三希堂」にこれを刻し、王澐、蔣衡最も力めてこの帖を表章す、眞に劇迹である。

(考)

楊守敬曰く、初唐の碑で、歐虞以外に、今存するものは、殷令名の書「裴鏡民碑」を以て最とする、「寶刻類篇」に、稱し

て字畫精妙、歐虞に減ぜずとして居るのは、洵に溢美でない、虞の冲和と、歐の峻拔とを兼ね有して居る、今は虞歐の書、皆已に磨泐し、これを學ばんとするも、盡く舊本を見ることは出来ないのであるから、此の碑を得て、玩味すれば、貞觀の盛規を眼前に見ることが出来る、眞に無上の鴻寶である。

顏真卿(唐人)

○

鳴鶴

日月爭光功偉哉 蔡州一死復何哀

丹心留得磨崖字 照曜唐家天地來

名は眞卿、字は清臣、瑯琊の人である、天寶の末、平原の太守に拜せられ、又魯郡開國公に封ぜられたともある、

故に人號して魯公と云ひ、有名なる節義の士である。朱長文は其書を評して、篆籀の義理に合し、分隸の謹嚴を得、放つて流れず、拘つて拙なからず、書の至れるものなりと云ひ、或は又、顔眞卿の楷書は、北碑「高植墓志」及び穆子容が書する所の、「太公呂望表」に出たと云ひ、或は又、歐虞褚の三家の長所を、顔眞卿は一手を以て、これを擅にして居る、故に歐をして「郭家廟碑」を見、虞褚をして「宋璟碑」を見せしめたならば、必らず心を撫して高踏するであらうと云つて居る、是れ所謂一碑一面貌を具する所で、博く古を學んだ所以である。楊守敬は曰く、顔魯公の書は、氣體質厚にして、端人正士の褻視すべからざる如きものがある、「宋廣平(璟)碑」は、昔人

これを「瘞鶴銘」に擬したが、近ごろ剝蝕が多い、今存するものでは、「元次山」、「郭家廟」、「殷君夫人」、「李元靖」、「八關齋」の如き、體格に少しの異同はあるが、而も大致に於て殊なる所はない、唯だ「藏懷格」は、稍や瘦削なるを嫌ひ、「顔家廟」、「東方畫贊」は、字、櫛比に近く、重開眞を失ひ、「多寶塔碑」は、少作ではあるが、實に已に別に生面を開き、「中興頌」は、雄偉奇特で、自ら一代を籠罩するに足り、大字の「麻姑仙壇記」は、原石久しく佚し、小字の「麻姑仙壇記」は、宋僧が臨寫したのだとの説もある、此れ或は今傳ふる所の、蠅頭細字の本を指したのであらう、「忠義堂」の載する所は、則ち古厚團結、三鼎彝の如く、當さに顔書の第一に推すべきである云々。凡そ何人

の書に限らず、名家の筆は、必らず變化するものであるが、中にも顏真卿は、一碑一面貌とも稱し、其の書くたびに書風の異なるのを以て有名である。又顏真卿に於て、特に記すべきは、楷書と同時に、行草に巧みなることで、行書の名蹟は、古來甚だ乏しい所に、其の「爭坐位」三稿あるは、喩へば沙漠に玉を拾ふが如き感じを起さしめる、如何に六朝癖の人でも、行書を學ぶには、是非とも一たびは顏真卿を窺はねばならぬやうになつて居る。

多寶佛塔碑(顏真卿楷書)「宣和書譜」に云ふ、其書點は、墜石の如く、畫は夏雪の如く、鉤は屈鐵の如く、戈は發弩の如く、千變萬化各一體を具へ、「中興頌」の閔偉、「家廟碑」

の嚴重、「仙壇」の秀穎、「元魯山銘」の深厚の如き、衆美並に此に萃まる、此の碑は、早年の書にして、已に歐虞徐沈が暮年の筆と相上下せり、「中興」以後に及んでは筆力迥かに前と異なる、其得る所のものは愈々老せりと。

麻姑仙壇記(同上)大字小字二本あり、大字は大曆六年、小字は同十年の刻に係る、「集古錄」には、顏の書に非ざる事を疑へり、蓋し顏は未だ嘗て小字を書せず、惟ある所の「千祿字書夾注」の字の體法、此本と同じからず、故に之を疑ふものなるべきも、細に筆畫を玩へば、巨細皆法あり、顏に非ざれば到底能はざる所なりと云へり。

顏氏家廟碑(同上)此碑四面環轉、李陽氷の篆額あり、石は陝西西安府學に在り、其書嚴正を以て稱せらるゝも、

之を「多寶塔」時代に於ける壯年の作に比するに、老蒼の氣自ら點畫の間に現はれ、筆法自在にして喜ぶべきもの多し。

宋璟碑

宋璟碑(同上) 紆餘蘊藉、人をして之を味つて、極りなからしむ。大歴七年の作で、直隸省沙河縣に在り、碑側の文字は、大歴十二年の補書に係り、實に顏眞卿七十歳の時であつた、由來顏の書は褚遂良から出たので、筆の間に、散見することを得るが、此の碑は、褚七分顏三分とも云ふべき書振りで、顏書の淵源を窺ふに足るべき傑作の一で、或はこれを「瘞鶴銘」に擬するものもある。

中興頌

中興頌(同上) 一に「磨崖碑」と云ふ、永州浯溪の上に於て、崖石を斲て之を刻す、刺史元結の選文にて、顏魯公の正

爭坐位帖

書大字たり、磊落にして人を驚かすものがある。

爭坐位帖(顏眞卿行草) 唐代名帖の一に數へらるものなり、顏魯公の書は、正書にして碑碣に刻まるもの多しと雖も、行草のものは少なく、殊に此帖は郭知運に與ふる書の初稿なるべく、中に塗改の處多く、不用意の間に、却て其妙を見る、宋の米元章は、之を稱して篆籀の氣あり、眞に傑思なりと云ひ、楊守敬はまたこれを稱して、王羲之後、魯公の此の帖を以て、創格と爲し、絶て姿媚を去り、獨り古勁を標すと云ひ、また何紹基は、これを以て「蘭亭」の上に出づると稱して居る。此の石は、宋の時に刻したもので、今に至るまで、日々これを氈拓して居るが、而も剝蝕の少ないのは、刻手の精良なること云ふま

でもないが、また石を選ぶの精しき、其の右に出づるなきを知る事が出来る。

祭姪稿(同上) 此の帖は、「忠義堂」の刻する所最も遒厚で、次は「餘清齋」もまた佳なり、然し此の二者は、面貌が異つて居る、或は宋人の臨本だとの説もあるが、宋人に此の風格あることを聞かない。

祭伯父稿(同上) 魯公の三稿は、何れも貴重であるが、此の稿は、古へ撫刻する者が少なかつたので、「鬱岡齋」の刻する所は、古刻から翻出したものらしく「坐位」、「祭姪」と並べ論ずることは出来ない。

自餘の顔帖 尙ほ甚だ少くないが、左に其の帖名のみを記して置かう。

- 元次山
- 郭家廟
- 殷君夫人
- 李元靖
- 八關齋
- 自書告勅
- 竹山聯句
- 張令曉告勅
- 劉太冲叙
- 鹿脯帖
- 寒衣帖
- 蔡明遠帖

贈裝將軍詩

瀛洲帖

柳公權(唐人)

名は公權、字は誠懸、京兆華原の人で、夏州の書記として穆宗に入奏した時、帝曰く吾れ佛廟に於て、卿の筆跡を見、之を思ふこと久しとて、留めて右拾遺となし、左右に侍書せしめたのであるが、帝が或時筆法を問ひしに對へて、「心正しければ筆正し」と云ひ、帝容を改めて之を頷いたとは、有名な話である、官は太子の大保に至り、八十八歳で卒した。柳公權は顔真卿以後の一人で、何人もこれと競ふものはない、併し例へば「和尚碑」の如き、天骨開張して、善くこれを學ばないと、流れて癡悍とな

心正しければ
筆正し

る。故に鳴鶴翁も亦た嘗て「柳公權には、一種の癖があつて、公權を學ぶものは、大抵其の癖に罹り、一旦これに罹ると、容易に取れない、余も亦た其の癖に罹つて、これを取除けるに、非常に骨が折れた」と謂つて居られた。併し後に至つては、才を領めて範に就き、終に雅淡に歸したので、「高元裕」の一碑は、尤も完美なりと稱せられて居る。

唐朝の行草

唐の楷書が、集めて大成せる、一種の特徴を有すること、前既に述べた通りであるが、それと相待つて、唐朝に於て著しく傑出して居るのは、其の行草である、但し其の中に就て、顔真卿の「争坐位」三稿に關しては、最早楷

王右軍聖教序

唐人の行書は
多く聖教序に
基く

書の所に於て述べたから、これを略すとして、此に特筆すべきは、行草の字體が、始めて石碑に刻せられたのは、唐の太宗の「晋祠銘」を以て、第一とすることである、次に記すべきは、懷仁集王羲之「聖教序」で、是も王羲之の條に於て、一通り述べることは述べたが、唐碑としての立場から、再びこれを語るの必要がある、而して李邕「北海」の楷行、懷素、孫過庭の草書に至つても、是れまた唐代の爲め、大に氣を吐くに足るものがある。

それに就ては、「石刻書法源流攷」に記載する所が、略ぼ要を得るに近いと思ふが、それに依れば、行書は、懷仁の聖教を以て、諸家の鼻祖とするので、唐宋以來、行書を習ふものにして、「聖教」を學ばないで、能く家を成したも

此地之黃字宙洪之日月也
 後言亦
 王錦
 雨瓦